

目黒稻門会設立15周年記念

加藤榮護随筆集

— まえがき —

2004年7月から2008年6月までの4年間小生は目黒稲門会の会長を務めさせて頂いた。これは、その4年間に書いた50編の小生の随筆である。その随筆を書くにいたった経緯を述べて、まえがき としたい。

この駄文を随筆集とし纏めたのは、幹事長の吉田博行氏のお勧めと、纏めの実質的な労力を頂いたのは、金井豊男氏であることを、最初に御礼申し上げたい。

小生は2代目、初代会長は眞仁田勉氏。元東京都副知事を歴任されていた。目黒稲門会はなるべく多くの人が、それぞれに役割を果たすべきで、特定の人が同じ役割を独り占めにしてはいけない。という眞仁田氏の考え方で会長も一期2年・2期までと云う決まりを設定された。

小生は2000年に脳梗塞を患い、3月31日から一月半リハビリに専念、6月には務めていた富士通の関係会社PFUの社長を辞して、2年間PFUの相談役を務め、その後一切の仕事から解放され、目黒稲門会の一員として老後を楽しんでいた。眞仁田会長を中心に月に一回寿司屋の二階で一杯飲むのを楽しむ老後であった。眞仁田氏は23区稲門会の会長を務められた関係から、結局目黒稲門会会長を5年間務められ、その後を小生に託された訳である。会長に成ったとき初めてやったのが、昔やっていたパソコン通信、niftyserve を利用して、目黒稲門会のホームページを立ち上げた事である。その経緯はこの随筆の2005年3月号に詳しく述べている。

会員間の風通しを良くするために、小生は4年間毎月随筆を書くことを決意した。中西千可ちゃんが毎月原稿の催促にメールや電話を使い、小生を激励してくれた。お陰で、ひと月も絶やさず続ける事が出来たし、新宿稲門会の泰山木さんからは、しばしば感想文などを頂き、元気付けられたのは有難かった。

随筆の内容は全く小生の経験談を順不動で羅列したもので、少々恥ずかしい出来であるが、我が目黒稲門会初期歴史のご参考になれば幸いである。

2014年6月吉日 加藤榮護



- 目次 -

まえがき	1
2004年(平成16年)	
01 会長就任挨拶	5
02 チーズどんぶり	6
03 昭和28年夏	7
04 日本酒の話(その1)	8
05 若者と老人	9
06 早慶の違い	10
07 血液型 -反省するB型-	11
08 平成16年を終えて -新しい年への期待-	12
2005年(平成17年)	
09 瀬古選手の話	13
10 ゴルフの話	14
11 インターネットとパソコン通信	15
12 我輩は養子である	16
13 東横線の車窓から	17
14 第6回総会会長挨拶	18
15 60倍の生産性	19
16 誕生日に想う	20
17 我が家の庭	21
18 50年前の話	22
19 2005年の反省	23
2006年(平成18年)	
20 会長随筆 2006年はじめ	24
21 SPRING HAS COME	25
22 三綱領	26
23 ポリールと酒	27
24 プール	28
25 サマータイム	29
26 第7回定時総会、会長挨拶	30
27 盛夏とカラオケ	31
28 早稲田実業の全国制覇	32
29 9月の終わりに	33
30 姉の三回忌から	34
31 今年もあと少し	35
32 庭の辛夷(こぶし)	36

2007年(平成19年)

33	平成19年の一月は斯くして過ぎた	37
34	春が来た？ 映画の季節？	38
35	春宵一刻直千金	39
36	缶ビール・燻ビール	40
37	スリ そして 酒の歌	41
38	今年も半年が過ぎた	42
39	梅雨の終わりに	43
40	この8月の暑さに	44
41	誕生日を迎えて	45
42	多忙な10月	46
43	日本酒の話(その2)	47
44	2007年の終わりに	48

2008年(平成20年)

45	平成20年を迎えて	49
46	寒い冬	50
47	春は来たが...	51
48	3月から4月にかけて	52
49	2008年5月の終わりに	53
50	2008年6月の終わりに(最終号)	54

付録	それはマッカーサーが作った法律か？	55
	手帳一冊、酒一升	56

01 会長就任挨拶 DATE: 07/11/2004 02:47:00 AM

この度、真仁田会長の後を受けて、目黒稲門会の会長に就任することとなりました。大変名誉あることだと、聊か緊張いたしております。副会長、幹事長等執行部役員を始め、会員各位のご協力を頂き、我が稲門会の現在の和気藹々とした雰囲気をも更に盛り上げて行きたいと思っています。

元々、小生が目黒稲門会に出席したのは、この会の発会より、2年くらい遅れた2001年の総会の時からであります。外岡大先輩、隣の市瀬さんたちのお誘いを受けました。小生はその前年の春先に脳梗塞を患いまして、約1ヶ月半の療養で殆ど全快いたしました。70歳の坂を越える時でありましたので、40年以上に亘るサラリーマン生活に終止符を打ちました。それからは、天下晴れて自由の身となり、毎日が日曜日の身分を謳歌することとなりました。

振り返りますと、小生は早稲田大学に6年間お世話になりました。社会人となってからは、情報化時代の波に乗って会社も発展し、特に早稲田の卒業生が増え職域稲門会も1600人を超える大集団に成長しました。こうなると、下手をすると社内に学閥の弊害が心配される様な事態もあり、職域稲門会もあまり派手には出来ないような雰囲気もありました。

しかし、我が目黒稲門会の会員にはもっともっと拡大の余地があります。若者は勿論、60歳以上の会員が増えることが大切だと感じています。若者は、文字通り今現役、社会に貢献するには職場が中心であろうかと思えます。60歳以上は新現役と言う新しいジャンルを切り開く場として、共に目黒稲門会を活用したいと思えます。高齢者が生き生きとした生活を送ることこそが、今の社会に求められているのではないのでしょうか。

本日は、母校、各地区の稲門会の会長のご来駕を頂き本当に有難うございました。改めて、感謝申し上げたいと思えます。

最後に、早稲田の栄光と、ご出席の皆様のご健勝をお祈りします。



02 チーズどんぶり DATE: 07/18/2004 02:42:14 AM

今から約50年前の昭和27年(1952年)、私は浪人生活2年を経て早稲田大学第一理工学部数学科に入学した。わずか21名、新設4年目の小所帯であった。中島勝也先生が東京大学を卒業され、初めて早稲田の数学科に赴任された年である。

愚弟は建築家にならんとして東京芸術大学を目指していたが、兄弟二人揃って、当時目黒区駒場にお住まいの山脇巖教授のお宅を訪問、その後愚弟は山脇教授のアトリエで研鑽を積むこととなる。因みに、山脇家の裏隣は戦後、前田公爵邸が米軍に接收された屋敷で、進駐軍のリッジウェイ司令官の住まいであった。

山脇先生は戦前(1930~1932年)ドイツ、 Dessau のバウハウス(bauhaus)に、令夫人の道子様と一緒に留学された建築家で、帰国後建てられた駒場のご自宅はバウハウスの建築様式そのもの、機能美あふれるものであった。バウハウスは進歩的な総合造形大学としてその活躍ぶりはユネスコの文化遺産にもなっている。そのバウハウスも戦前ナチスドイツの迫害を受け、1933年に解散の憂き目に会う。そして、その指導者であった建築家のグロピウス氏はアメリカに渡られた。

山脇先生は昭和27年当時、日大芸術学部の主任教授として建築部門に限らず学生の指導に当たっておられた。芸術を志す若者が良く集まり、山脇御夫妻のお世話になったものだ。写真家の田沼武能氏なども当時の仲間の一人であった

表題の「チーズどんぶり」とは、そのときご馳走になった夕食である。どんぶりに軽くご飯を一杯、真っ赤なエダムの丸いチーズを粉状におろして、ご飯にたっぷり目にかける、そこに微塵切りのハム、刻んだ紅生姜、梅干、バラバラにした焼き海苔などを振りかけ、熱いお茶をかけて蓋をし、しばし待つ。ご飯に沁みこんだチーズや、一連の振りかけが見事に調和して、今まで味わったことのない幸福感に浸った。この料理は山脇夫人がバウハウスに留学中に、日本から送られてくる食材を使って自ら考案され皆に喜ばれたと聞いた。昭和27年の頃、まだ米穀通帳なるものが必要であり、区役所から支給される外食券なるものをもっていないと、コメの飯には有りつけなかった。このような時期に、小生は度々山脇家にお邪魔し、庭の掃除を手伝ったりしながら、ご馳走に与った。そしてヨーロッパの文化にも接することが出来た。

この「チーズどんぶり」はその後、小生の自宅でも、また金沢のマンションに一人住まいの頃も手軽な定番となった。又、今は潰れた銀座の小料理屋でも小生向けの特別メニューとして、多くの同僚、顧客に楽しんでいただいた。その銀座のお店でのチーズは、ブルーチーズに変身した。

皆さんも是非、挑戦してみてください。

03 昭和28年夏 DATE: 08/01/2004 09:56:54 PM

今年、新潟、福井と大水害が発生した。水害と言うのは、もっとも後始末に困る現象である。災害に遭われた方々には心からお見舞いを申し上げたい。小生も昭和28年、九州地方の大水害に直面した。それは、昭和28年小生が早稲田大学2年の夏休み前6月末だった。当時、夏休みは7月、8月と二ヶ月間あった。ところが、6月末に阿蘇に住む兄から電報が届いた。「鹿児島本線が不通、帰りは延岡周りで帰省せよ。」因みに兄も戦前の早稲田法学部の出身である。当時、東京から熊本に帰るには、直通は国鉄の急行「霧島」か「阿蘇」が標準コースだった。ところが、下関と門司間の関門海峡をつなぐ関門トンネルは水びたし、九州各地と本州への連絡は関門連絡船を使うしかなかった。小生の故郷、熊本市は阿蘇地方の大雨で白川が氾濫、市に架かる橋が殆ど破壊された。列車の線路は飴のように曲がり破壊され、各地の堤防は決壊、市内の建物が殆ど床上浸水、デパートの地下街は泥に埋まった。

そういう中で、小生の盟友、安田昌資君が左手首切断と言う事故にあった。彼とは、旧制中学時代(濟々覺)からの友人であり、小生と共に2年浪人して早稲田に入学した仲である。彼は第一法学部、小生は第一理工学部であった。夏休みが終わって上京の時、彼は左腕を肩から吊り、同じ満員列車で東京へ向かった。その時から、まだ傷む心身の傷と戦う我が親友とその痛みを分かち合いながらの一部屋での共同生活が始まった。

その、下宿をさせて頂いた親切な方が、現在の鮎八の裏手にお住まいの川崎さん宅であった。稲門会の三土会に初めて参加したとき、念のために川崎邸を訪ねてみた。ご長男と奥様にお会いすることが出来た。当時の主の川崎綾子さんは、お子様方が既にご家庭をお持ちで、小生の母親と同じ年齢であったと思う。そして我々二人を、本当の子供のように可愛がって頂いた。因みに、川崎家のご子息達は何れも慶応の出身であったが、早稲田の学生は質実で良く勉強すると「おばさん」からの評判が良かった。我々は川崎綾子様のことを、気軽に「おばさん」と呼んでいた。その後、早稲田を卒業する昭和31年までの3年間ずっとお世話になった。

後日談であるが、我が盟友の安田昌資君は卒業に当たり、左手のない人間に今時就職は困難との厳しい話を大学当局から聞かされ一念発起、東京高裁の事務局に席を置き、難関の司法試験に挑み、これをクリヤ。今も、渋谷の弁護士事務所では活躍中である。左手を無くし、義手をはめて、テニス、ゴルフ、スキーを現在も楽しんでいる。そして、一昨年、彼は藍綬褒章の受章の榮に浴した。

(蛇足)

昭和61年、小生が肺ガン・肺結核の疑いで入院した時、安田弁護士が見舞いに来て曰く「お前の奥さんのことは、俺が一生涯面倒見てやるから心配するな。」

小生は少し心配になった。

04 日本酒の話(その1) DATE: 09/03/2004 02:23:40 PM

前回は昭和28年の思い出を書いた。今回は一転して時代に関係のない話をしたいと思う。

私は熊本県阿蘇郡高森町の造り酒屋で9人兄弟姉妹の6人目の次男として生まれた。我が家が酒を造り始めたのは、宝暦12年(1762年)と言う。9人のうち二人は幼くして亡くなっているため、現存しているのは7人、男4人、女3人の7人兄弟姉妹であるが、全員酒好きである。真冬、酒を絞りはじめるとき、酒粕を炭火で焼いて食べるのが楽しみだった。小学校の頃同級生の連中が我が家に遊びにくる時にこれを振舞うと、中にはそれだけで顔を真っ赤にしてしまう酒に弱い子もいた。親父の晩酌は当然毎晩の事だったが、親父が酔っ払ってクダを巻くと言う情景は見た覚えは無い。そばにいて時々盃1~2杯くらいは子供たちも飲んでいて。

さて、話は現在に戻る。4年半前、小生は脳梗塞を患って約一月半入院した。丁度、小渕元首相が倒れた前日に小生が倒れ、小生が退院した日に小渕さんは亡くなった。改めて小渕さんのご冥福をお祈りしたい。合掌。いよいよ退院を前にして、食生活の注意を担当医から与えられた。何と、納豆を食べてはいけないというのだ。がっかりして、「酒は如何ですか？」と小生。若いお医者様は、「酒は飲まないより飲んだ方が良いですよ！血の巡りが良くなるから」と言うのだ。一瞬耳を疑ったが、これに対してはこれ以上何も聞かないことにした。下手に、適量などを聞いたらそれに縛られることになってしまうと思ったからだ。自分で飲む酒の量は自分で決めれば良い。人生70年にもなれば、「自ずから矩を超えず」と孔子様も言っておられる。

会社に復帰して、新橋の某飲み屋に部下と3人で出かけた。その店の女将は、福井県出身の早稲田大学教育学部の卒業生であった。

「加藤さん、この度は大変でしたね、皆さんとご一緒でご無理なさらないように、加藤さんの分だけは白湯にしておきますから、、、」

「とんでもない、酒は飲まないより飲んだ方が良いと医者から言われているんだよ」と小生。一本目の熱燗を飲み始めた。久しぶりに流石に美味しい。

「ところで、この徳利には正味何合入っているの？」と小生。

「7勺です」。

「じゃあ2本にしよう！2本にしても1.4合、四捨五入すれば1合だ」という調子で2本目に入った。

酒の味は肴とともに、益々旨くなっていく。

2本目の半分くらいに来た時、「何だ3本飲んでも2.1合だ」と言うことに気がついて、結局職場復帰の第一日は3本で打ち止めにした。

05 若者と老人 DATE: 10/05/2004 08:56:04 PM

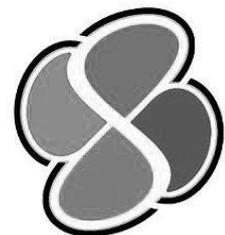
1931年9月26日は小生の誕生日である。車の免許証更新は何時の頃からか、誕生日までに済ますこととなっていた。最近では誕生日前後ひと月、計2ヶ月の余裕があるようになり、昔と比べると余裕が出来て楽になった。これは、つい一週間前に遭遇した話である。

2ヶ月以上前に免許証更新の通知が当局から送られてきた。「70歳を超えた人は全員適性検査を受け、老人の為の交通安全のための講習と実技テストをします」と言うのである。場所は都内某所にある運転教習所で、約3時間と検査費用6,000円強を納入しなければならない。電話で申し込みをしたら、混み合っているのと1ヶ月後を指定された。実際に受けに行ったら、当日は男女合わせてわずか8名。検査官は2名の中年男子。やたらに老人扱いをされて、大事にまるで子供に教えるように親切なのだ。警察関係の役所でこんなに親切に扱われたのは生まれて初めてであった。テストの内容の詳細はここには述べないが、興味深かったのは、「運転免許証保持者は全国に約8千万人いて、運転免許証を取りに来る人数は毎年減少している。教習所も少しずつ廃業に追い込まれている」と言う。そして、70歳以上の老人を再教育するのは、第一に交通安全の為の施策であり大事なことであるが数年前までは75歳以上だったけど、現在は70歳以上、あと数年したら65歳以上になるという。なるほど、ここも少子化対策、教習所ビジネスも高齢者に照準を当ててきたなあ、と一人苦笑した。

さて、目黒稲門会会長就任の挨拶について誤解があるという忠告を受けたので、些かの弁明をしたい。つまりは小生の挨拶の最後に「若者は職域中心で地域稲門会は高齢者と断じている」という解釈が一部でされていると云うのだ。小生は自身の経験から述べたまでのことで、決して地域稲門会での活躍が高齢者が中心で若者は入らなくて良い等とは思っていない。一人で仕事をされたり、中小企業で活躍されたり、家庭の主婦となられている校友も多数おられるはずだ。老いも若きも「集まり散じて人は変われど、仰ぐは同じき理想のひかり」同門の誼は大いに活用したいと切望している。

そして、稲門の若者たちをお願いしたいのは、少子化対策に真剣に取り組んで貰いたいことだ。老人にはもう能力は無い、稲門の優れた遺伝子を世の中に残せるのは、若者だけだ。

以上この場を借りて、皆さんにご迷惑と不信感を与えてしまったことをお詫びして、今回の随筆の結びとさせていただきます。



06 早慶の違い DATE: 11/22/2004 12:45:26 AM

これは、小生が富士通時代の体験である。

慶応大学の湘南キャンパスができて、そのオープニングの式典が開かれたときのことである。富士通もこのキャンパスの情報システムの構築や、学生・研究室の設備などに関係していたので、当時、富士通の国内営業部門の担当役員として小生もご招待を受けた。立派な講堂で式典が始まった。しかし、式典の壇上に座ったのは、当時の慶応義塾の石川塾長、早稲田大学の小山宙丸総長、それに神奈川県長洲知事の3人だけだった。普通このような式典には、文部省の役人を来賓に仰ぎ、祝辞が述べられる場合が多い。ところが、この式典では前記3名のみであったのに先ずびっくりして嬉しくなった。そのうえ、この御三方の祝辞がユーモア溢れるものであった。早慶出身の出席者一同は、私学の雄としての早慶の門に学んだ喜びを感じたと思う。特に、小山宙丸総長の話は「早稲田と慶応の違い」について訥々とした話し振りと共に出席者一同に感動と与えたと思うので、その内容を此処に紹介しておきたい。もう大分以前のことなので、不確かな部分があることはご勘弁願うとして、、、

早稲田と慶応は色んな面で違いがある。色んな運動部の名称も違う。あるとき、全日本の競艇に慶応が優勝して、その祝賀会に小山総長が招待された。当然、予選の段階で早稲田は慶応に敗れて、悔しい想いで総長は出席したが、その祝賀会での多くの人の挨拶の中で、慶応の出身者からは一人も早稲田を破ってという言葉が出なかった。自分は聞き違いでは無いか？とその時の録音テープを取り寄せて、後日聴いてみたがやはり、早稲田を破りという言葉は発見できなかった。そして、慶応はさすがに紳士の大学だと敬意を抱いた。これが逆の場合だったら、どうだっただろう。早稲田マンは必ず慶応を破りと言うだろう。私は今、このことを思い、これまでの早稲田が犯してきた非礼とこれからも犯すであろう早稲田の習慣に対して、前もってお詫びをしておきたい。というものであった



VS



07 血液型 -反省するB型- DATE: 12/26/2004 01:09:16 AM

血液型で人間の性格を分類する話が一頃流行った時代がある。これは、20～30年前のテレビで見た話である。

ある幼稚園か保育園で血液型で幼児を観察した話だった。幼児が幾つかの島に分かれて遊んでいる時、何処かの島で歓声があがると、他の島から何人かの幼児がそこに集まってくる。しばらくして、別の島で歓声が挙がると又他の島から幼児が集まってくる。この連中は殆どが先ほど集まってきた幼児達であると言う。そしてこの種の子供たちの血液型は殆どがB型だというのだ。B型の人間の特性はこのように、新しいことに興味を持つが、すぐに飽きて、長続きしない、勝手な人間が多いという。

このテレビ番組を小生は、たまたま家内と一緒に見ていた。小生は心の中で、これは反省しないとイケないと思い、家内を振り返った。家内はニコニコしながら言った。

「私はB型だから仕方が無いのです」

反省するB型と、典型的なB型の違いであると、その後は気を使っている。我が家は亡くなった家内の母親もB型、当然小生の忒もB型で、家中がきれいに整理整頓されたことは無い。



08 平成16年を終えて ー新しい年への期待ー DATE: 12/31/2004 11:35:24 PM

過ぎゆく平成16年。思えば、昭和16年は大東亜戦争の開戦記念の年だった。小生は昭和6年生まれだから、わずか10年しか経っていない時のことだった。

一方、平成はあの小淵さんが平成オジサンと呼ばれたときから既に16年経ち、こうして17年を迎えようとしている。一年の経つのは、歳をとれば採るほど早くなると感じる。

さて、小生、今年は残念ながら、稲門グリークラブ・シニア会の演奏会に出席できなかったが、昨年は外岡明先輩のお誘いで、この演奏会に出席できた。そして、平均年齢70歳を超えるというのに素晴らしいハーモニーを満喫できたのだった。因みに、外岡先輩の令兄もその合唱団のメンバーであられる。昨年夏、稲門グリークラブ・シニア会のCD「日本の歌」が発売されたが、すぐに売り切れたそう。本当に素晴らしい合唱だと思う。なにより発声が綺麗だ。全20曲、明治34年の「箱根八里」に始まり、昭和64年の「川の流れるように」まで、はっきりした発声、あいまいさの無い素晴らしいハーモニーだ。

さて、2004年はますます世界中で天変地異、地球環境の破壊が進んだ年だった。一方において、世界各地で起きる戦争は一向に静まるどころか、益々激しくなっていく気配がある。そういった中で、目黒区柿の木坂教会付属のベテル幼稚園の耐震工事のための改修工事中の仮の宿を、道を隔てた中根町の立源寺さんが引き受けてくださった話は、一服の清涼剤であったと思う。宗教が本来持つべき無限の優しさを、我が目黒区のお寺さんが世界に範を示してくださったと思い、小生としては立源寺さんに最大の敬意を表したい。世界の心のハーモニーは我らの稲門グリークラブのように美しい均整のとれたものであって欲しいと思う。

さて、我々の目黒稲門会で歌う「都の西北」もハーモニーを付けて歌ってみたらどうだろうか。



都の西北・・・

09 瀬古選手の話 DATE: 01/31/2005 11:57:45 PM

今日は1月30日、今年も早やひと月が終わろうとしている。昨日は世田谷稲門会の新年会に外岡先輩と一緒に出かけた。場所は、目黒区にある駒場エミナースであった。マラソンで数々の記録を作った瀬古俊彦選手の一時間に渡る講演と懇親会であった。近隣の稲門会からも、我が目黒、大田、渋谷、文京から代表者が招待され和気藹々の雰囲気で行われた。出席者は131名と言うから、わが目黒と比べ2倍以上の人数である。中には、今年100歳を迎えられた内藤隆福大先輩も出席されていた。

さて、瀬古氏の講演だが、「箱根駅伝を終えて」と言う題であった。ラグビーは勝ったが、駅伝は惨憺たる状況で早稲田の選手はみんな泣いていた。瀬古氏は、試合で泣くのではなく、練習で泣け！と選手を励ましていると言う話であった。内外の一流選手の練習にかける情熱と実態を彼の経験を交え、ユウモアたっぷりの、実に楽しい一時間の講演であった。特に、日本の女子長距離人の練習ぶりには、ただただ驚嘆するばかりである。

小生も、約20年位前のことであったと思うが、増田明美さんが現役の選手、確か川鉄に所属されていた頃のことを思い出した。丁度、小生が仕事でスペインに出かけるときに、成田空港でチェックインしようとしていた。数人の外国人客に混じってトレーニングウェアを着た小さな女の子がいる。良くみるとそれが増田明美選手であった。「彼女は世界一のランナーだ」と小生は周りの外人に説明した。そして、彼女は飛行機に乗った途端にアイマスクで目を覆い、眠ってしまった。飛行機はやがて、給油のためにアンカレッジに到着、暫しの休憩となる。乗客が待合室で買い物や、飲み物で休憩していたとき、増田明美さんは、待合室のなかでランニングを始めた。皆、啞然として眺めていた。小生は彼女の走りに上下動がとても少ないのに気がついた。やがて一時間位の休憩時間が終わると、彼女は床にゴロンと仰向けになりストレッチ体操を始めた。そして給油の終わった飛行機に乗った。再びアイマスクをかけ、眠ってしまった。集中力、継続はすべての場合にもものを言うと思う。

WESC-WASEDA EKIDEN SUPPORT CLUB という会ができたそうだ。会費10,000円。皆さん、入りましょう。瀬古氏曰く、強くなってからではなく弱いときに、応援しましょう。

10 ゴルフの話 DATE: 02/28/2005 12:47:26 AM

本来ゴルフの話題を採り上げるのは、ゴルフをしない人にとっては全然興味の無い話であり、また、エチケットを欠いた行為であるかもしれないが、今回はその禁をあえて破ってみようと思う。

小生がゴルフを始めたのは、昭和53年くらいの時だったから47歳、当時としては大変遅かった筈だ。コンピュータのシステムエンジニアとしての仕事が非常に忙しい職種であった関係から、一般の人のように一日をかけて、高い金と暇を費やすような身分には恵まれていなかった。しかし偶々、日米コンピュータ会議がサンフランシスコで開かれ、そこに出席した後、ニューヨークに移動し、アメリカ駐在のU君が小生をゴルフに招待してくれた。アメリカでのゴルフ料金はパブリックコースだと、東京近郊でやるより一桁安い料金で出来る。ハーフをまわるのがやっとだったが、虜になった。人が面白がっているものは、何でも面白いものだと思った。

さて、小生は昭和61年の初めに結核と診断され、8ヶ月の入院とその年一杯の投薬、安静を強いられた。翌年の5月、会社の営業部門中心のゴルフコンペが開かれ、そこで小生はいきなり優勝してしまい、「加藤さんは昨年休んでいたが、本当はゴルフの練習をやっていたに違いない、そう言えば顔色も黒くなっていた」等とさんざん冷やかされたものだった。勝因を挙げれば、「冷静にプレーした」の一言に尽きる。何しろ、1年間の療養のあと、1ラウンドをまともに廻れる自信は無かった。とにかく落伍しないように、スコアを気にせず、体の力を抜きゆっくりと回っただけだった。そうしたら、ボールが素直にまっすぐに飛んだのだ。後日、ゴルフにまつわる単行本に出会って、成る程と思った。ここにその話を紹介したい。

ある野原で蜘蛛と毒百足(むかで)が出会った。蜘蛛は一瞬このままでは毒百足に食われてしまうと思い一計を案じた。

「百足さん、百足さん、貴方は百本もある足を良く順序正しく動かして、実に優雅に歩いていらっしやいますね。私なんかたった8本しかないのにそんなに優雅にはとても歩けません。」

毒百足は一瞬誇らしげ喜んでしたが、その後一歩も歩くことが出来なくなり、遂に死んでしまった。

ゴルフのスイングには、チェックポイントが100位あるそう。これを残らずチェックしていたら、時間ばかり掛かるし最後には体が硬くなって一番打ってはいけないタイミングでショットすることになる。小生が優勝したときは、まさに無心であったことが勝因であったのだろう。その後、ある先輩とゴルフを楽しんだとき、ラウンド83と言う小生にとっては、空前絶後のスコアを記録したことがある。そのときは「毎ホールをボギーで回れば、中に何回かはパーがとれる筈だ。とすれば、90台を切るのは当たり前の話だ。」と考えついた。しかし、その後90は勿論、最近では100を切るのも困難になってきた。この頃は、体力だけでなく、精神力も衰えてきたと自戒し、体力気力の充実に専念している次第である。

11 インターネットとパソコン通信 DATE: 03/29/2005 09:26:00 AM

我が目黒稲門会のホームページは、2004年7月にOPENした。このホームページを立ち上げるには、なんと言っても中西千可子さんの努力に負うところが大きいと思う。小生が目黒稲門会の会長になる前から、インターネットを利用して、目黒にもホームページを作りたいと言う声があがっていた。中西さんが、私がやりますと手を挙げたので、小生は昔取った杵柄で応援することにした。

先ず、nifty の古河社長に連絡をとり、「目黒稲門会のホームページを作りたいので、協力を頼む、積極的な女性が担当なので、一度会って欲しい」旨連絡をとり、中西さんを大森にある nifty 本社に案内した。nifty の社長も、秘書を伴い待ち受けていた。そこで、ザックバランな質疑応答を繰り返した。小生がやったのはそこ迄である。

今回は、インターネットに至るまでの、小生の経験談をお話したいと思う。書き出すときりが無いので、ほんのサワリだけであることをお断りしておきたい。

昭和61年、富士通と日商岩井が50%ずつ出資してパソコン通信会社を立ち上げた。アメリカの CompuServe という会社のノウハウを買った。その会社に、株式会社 NIF という名前をつけ、niftyserve というサービス名称をつけた。富士通・日商岩井の頭文字ととれるが、正式には Network Information Forum の頭文字 NIF というのが正しい。単なるパソコン通信ではなく、知的生産性を上げるためのツール、謂わばフォーラムなのだと言う主張であった。

当時、パソコン通信と言うのは、若者や子供の半ば遊び道具というとられ方だったと思う実際に立ち上げたシステムは、もっと大人の用途に使えるものであることを実感した。一例を挙げれば、プロジェクトの進行状況の報告や提案、毎日起る様々な出来事の報告を紙でなく、このパソコン通信の掲示板に載せてもらう。グループの管理者はそれを眺めていれば、全社の出来事が把握できる。そして、これらの内容はそのまま自動的に文書として永久に残すことが出来る。いわゆるデジタルアーカイブが出来るのだ。実際、小生はシステムエンジニアを担当する役員として、こんなに便利な有難い道具に出会ったのは生まれて始めてであった。最初の頃、システムは未だ文字ベースの通信であった。当時から、これはマルチメディアへ発展していくものであり、技術の開発にはひと時の猶予も無かった。やがて、パソコン通信の時代はインターネットの時代に急激に変化していった。株式会社 nifty はこうして成長して行った。小生は富士通在籍時代、目まぐるしく変わる IT の時代を、コンピュータ開発の初期1958年から20世紀末まで、一貫してこの分野に籍を置き大発展の時代を過ごすことが出来たのは極めて幸福なことであったと思う。翻って、我が目黒稲門会のホームページの更なる活用を期待したい。

さて、今朝遅く起きたら、B型の家内が悲鳴を上げている。「猥褻なメールが届いていて、これがデリートできない。私はパスワードを忘れてしまって不要という返事が出せない。どうしたら良いの？」と言うのだ。朝から顔も洗わずに nifty に電話して、パスワードを知らせてもらうことにした。インターネットというのは、所謂オープンの世界のものであり、パソコン通信の時代の closed の世界では無いから、いろんな不都合なことも起こるものだ。ウイルス等は日常茶飯事、便利なものにはその裏に弱点もある。自由な世界に生きるにはそれなりの自衛手段を持たなければならないのは、IT の世界でも、実社会でも同じことである。

12 我輩は養子である DATE: 04/26/2005 11:21:50 PM

昭和34年5月27日に我々は結婚した。結婚した当初は山村姓を名乗っていた。小生は7人兄弟姉妹の次男、順番で言えば5番目である。我が家は熊本県阿蘇郡高森町で代々日本酒の造り酒屋を営んでいる。小生の上に3人の姉と1人の兄、下に賢弟が2人。3人の姉たちは女学校を卒業すると間もなく結婚してしまい、一緒に生活した時期は幼児期を除いて、殆ど無きに等しい。

小生は昭和33年早稲田大学を卒業し就職、会社の寮で新人3人が一部屋で生活することとなった。初任給は12,000円。月末近くなると、人事関係の先輩にちょっと飲ませてもらったり、あるときはお金を借りたりしたこともあった。

遠縁のおばさんから、ある日見合い写真が送られてきた。洗濯物に困っていた小生はすぐに結婚することに決めた。ところで、新婦は一人っ子である。姓は山村のままよい。そのうちに何人か子供が生まれるだろうから、一人を加藤姓にして、加藤家を継がせれば良いと言うくらいに考えていた。ところが、結婚して7年目念願の男子誕生。しかし後が続かず結果的に子供は一人しか出来ないこととなった。その理由は省略する。

さて、長男が幼稚園か小学校へ入る前に、親子一緒に養子縁組をして小生も加藤姓を名乗ることとなった。正直な話、サラリーマンになって10年以上経ち、途中で改姓することに小生は躊躇した。真剣に悩んだ。こんなに自分が悩むのであれば、何人か子供が生まれた後に、一人だけ加藤姓を名乗らされる子供はもっと悩むだろうと思って、これは自分が養子になるべきだと思った。そして当時の小生の職場の上司N氏のご自宅に出かけて、「実は小生は今度、山村から加藤に改姓したいと思う。要するに養子縁組をしたい、子供が一人しか出来ないことがわかったので、こうするより仕方ありません。会社の仕事や顧客との対応などに支障は無いでしょうか？」と恐る恐る尋ねた。すると、部長のN氏はカンラカンラと笑い出して言った「君のことは以前から、本当は養子なんだと思っていた。養子縁組をするのが当然だ。分かった、明日から、もう君の事は決して養子だとは言わないことにする。つまらないことを心配するな。君はまだそんなに偉くは無いのだから。」という反応に、心から有難いと思った。そしてウイスキーを一本お土産に頂いて帰った。その後、やはり小生の尊敬する別の上司から、養子に貰われることは誇りに思え。駄目男を養子に迎える人はいない。現に自分の友人にも何人か養子になったのがいるが、みんな優秀な人達だ。自信を持って頑張れと激励された。

その後、自分を名乗るとき、山村と呼ばず加藤と呼ぶと昔のしがらみを断ち切って、自意識過剰だった青春時代を卒業できた感じで、毎日の行動が楽になった覚えがある。新年を迎え、会社の大部屋に部下たちを集め、今日から山村でなく、加藤と呼んで欲しいと大声で宣言した。気分がスーツとした。改姓した初日、隣の席に居た課長代理のH君が「山村さん、山村さん、Nさんが加藤君と呼んでいますよ」と言った。Nさんが早速加藤君と大きな声で呼んだらしい。小生は自分が呼ばれているのに気がつかなかった。未だ、加藤に成りきっていなかった。

蛇足ながら、我が目黒稲門会の大先輩の外岡明氏も外岡茂十郎先生に貰われた御養子様である。

13 東横線の車窓から DATE: 06/09/2005 01:20:46 AM

爽やかな5月も終わり、6月は田植えの月、じめじめした梅雨が始まるのも間もなくである。

小生は40年以上の会社勤めを終えて、もはや4年になろうとしている。昭和30年代、会社勤めを始めた頃、管理職と呼ばれる人達は殆どが男子であった。40年間の間に、女性の進出は目覚ましいものがある、小生が勤務したシステムエンジニアの世界でも、昭和60年頃に最初の女性課長が誕生した。御茶ノ水女子大出身と早稲田大学出身の才媛であった。思えば30年代の頃、女性が夜働くのは禁じられていた。昭和39年5月に小生は始めてアメリカに出かけた。バンキングシステムの調査のために1ヶ月半の出張だった。アメリカの銀行のコンピューターセンタに夜中に出かけた。そこで働いている人達の半分以上は女性だった。「アメリカでは、女性が夜中に働いても良いのか？」と小生が尋ねた。すると「日本では、女性は夜働けないのか？」と反問にあった。「日本には労働基準法というのがあって、女性は夜は働けない」と答えた。すると、案内していたアメリカの銀行マンは「それはマッカーサーが作った法律か？」と笑って応えた。日本は遅れているなあ、と嘲笑にもとれるように受けとれた。戦後わが国は、戦前の女工哀史の流れを戒めて、会社勤務の女性の人権を守るべく厳しい労働基準法が定められていたのだ。昭和のその時代と比べると現在の日本とは隔世の感がある。

さて、いろいろな問題が世の中で騒がれている。そして毎日のマスコミの話題は暗い話ばかりだ。少子化問題も大きな社会問題である。子供を産むことが出来るのは女性にのみ与えられた特権である。安心して子供を産める社会環境の整備と、人間の価値観の再認識が求められていると思う。

暗い話が多い中で、ささやかな話だが、東急東横線の車内で今年になって2回席を譲ってもらった。最初のときは、サラリーマン風の活気溢れる感じを受ける青年で、小生もそんな歳になったのかと聊か淋しい気にもなったが、甘えさせてもらった。小生は下車駅で青年にお礼を言って降りた。清々しい気持ちになった。2度目は、つい最近のことである、その日は家内と2人で都立大学の駅で乗車したとき、若い女性が家内に席を譲ってくれた。小生はその前のつり革に掴って立っていた。家内の横には中学生の男子が2人、何やら相談を始めていた。すると、その中の1人が立ち上がって小生に席をくれた、「恥ずかしいなあー」と言いながら。小生は彼らに丁寧にお礼を言って座った。



14 第6回総会会長挨拶 DATE: 08/01/2005 06:44:01 PM

本日、目黒稲門会第6回総会を迎えるにあたり、会長として一言ご挨拶申し上げます。私は昨年7月、真仁田会長の後を受け本会の第2代の会長をお引き受けいたしました。1年が経つのは早いもので、昨年ここで就任のご挨拶を申し上げたのも、つい昨日のような気がします。然しながら、只今皆様と一緒に黙禱をしました様に、まさかと思うような方々がお亡くなりになり、悲しみの極みであります。今日お集まりの皆様も、是非ご健康には特に気を付けていただきたいものと思います。

さて、我が目黒稲門会も創設6年が経ち、各部門の活動も活発になっています。本会理念・会則を読み返して見ますと、目的として「会員相互の親睦、交流と、早稲田大学の発展ならびに目黒区の地域社会への貢献」という言葉があります。後ほど、各部門の活動の内容紹介などでもご理解を頂けると思いますが、問題はもっと多くの会員の方々に、この総会や会合に積極的な参加をお願いしたいものと思っています。我々役員が足りないのではないか、との反省の弁も聞かれます。今年は、このように折角の会費まで納めていただきながら、親睦を重ねるチャンスすら少ないのでは申し訳ないという感じすら致します。

目黒稲門会は、すべては会員のボランティア精神の上に成り立つものと思います。先日23区支部の会で、専任の事務局をと言う意見まで出掛かりましたが、小生は反対の立場を表明しました。この1年間、役員や各部会長諸氏も中でもいくつかの交代がありました。皆さん夫々にご都合がおありになり、交代は必然なことですが、我が目黒稲門会の会員には歴戦の人材が豊富にあり、頼もしい限りです。

目黒に関係する、早稲田の交友がもっともっと親しく交流し、老いも若きも元気良く地域社会のためにそして早稲田の栄光のために、生きていこうではありませんか。

15 60倍の生産性 DATE: 08/30/2005 09:16:39 PM

戦後60年の節目、2005年8月も終わりに近づいた。郵政民営化問題から突如衆議院の解散、選挙が始まろうとしている。昭和20年の終戦のとき、小生は中学2年生であった。進駐軍を熊本陸軍幼年学校で迎えた。と言っても別に小生が幼年学校で教育を受けていたわけではなく、米軍のキャンプとして幼年学校に進駐してくるアメリカ海兵隊の宿舎の清掃に借り出されたただけの話である。

想えば、戦後実施された農地解放は日本の歴史上初の共産革命の嵐であったと思う。地主から容赦なく農地を接收し小作農に配布したのだった。一方において、悪性インフレが進む中、一所帯人月当たり500円以上の消費を禁止した。その実行のためには新円の発行が必要になり、それが間に合うまでの期間は切手の半分かくらいの大きさの証紙を旧円に貼り付けて使われた時代もあった。全く惨めな敗戦国の悲哀を感じていたものだった。

やがて昭和25年、朝鮮動乱が始まり、日本は所謂朝鮮特需で少しずつ景気回復の恩恵にあずかった。全く皮肉な話であった。警察予備隊は保安隊へ、そして自衛隊に成長していった。小生が社会人になったのは昭和33年、給与は12,000円だった。昭和39年には東京オリンピック、東海道新幹線が走り始め、目黒の柿の木坂周辺にも環状7号線が繋がった。世の中は毎年、経済成長を続けていた。そして毎年労働組合の打つ春闘で賃上げが実施されていた。

バブルが崩壊する前に、ある著名な経済人の話を聞いた。昭和30年頃、某社の大卒の給与は1万円前後、そして1990年代には、大卒の給与は約20倍にまで上昇した。一方、1ドル360円だったドルは、変動性への移行で100円～120円に下がり、国際的な日本人の給与はそれだけで約3倍。給与の上昇分と掛けあわせると、 $20/1 \times 360/120 = 60$ 倍。我々は、果たして60倍の生産性をあげているだろうか？ と言うものだった。

我が国は今、空前の借金を抱えているが、どうやってこれを清算していくのだろうか？



16 誕生日に想う DATE: 09/30/2005 01:18:48 AM

9月26日は小生の74回目の誕生日である。兄弟が多すぎた所為か、戦争中であつた所為か、とにかく我が家で誕生日のお祝いと言うものをして貰った思い出がない。何しろ9人生まれて、女性が2人幼くして亡くなっているので、1943年以降、我ら7人の兄弟姉妹は昨年までの60年以上の間1人も欠けたことはなかった。それが、昨年から今年にかけて、長女と末弟が相次いで死んでしまった。おまけに小生の弟の嫁が昨年の秋に亡くなった。一挙に3人のキョウダイが居なくなったことになる。

長女は90歳を越えて亡くなったのだから、天寿をまっとうしたと諦めも着くが、末弟は未だ65歳、なんと言っても若すぎる。彼は、兄弟の仲で最も健康に恵まれていた。高校時代はバスケットと駅伝競走のランナーとして勇名を馳せていた。小学校の頃から、医者に掛かることもなかった。

通夜の席で、「一人早く奥の院に入りやがって、、、」と残された3人の兄弟は愚痴を言いながら、淋しく酒を飲んだ。

そう言えば、小生は今までに3回、死線をさまよつた。1945年1月から2月にかけての肺炎。ペニシリンなどの新薬は未だこの世には無く、芥子のシップを胸に、1週間以上の絶対安静、高熱にうなされながら、45日を休んだ。旧制中学の1年生、叔母の家に下宿をしていたが、その叔母も肺炎。2人並んで臥せつた。3学期はろくに勉強も出来なかつた。次は、1986年の1月から8月まで、肺結核で入院。85年の12月家内の父親がなくなり、葬式を終えてすぐ、小生は肺に影ありとのことで、ひと月間の精密検査の結果、肺癌と肺結核の見分けが付かず開胸手術。結果は肺結核、そのまま入院。8月まで会社を休んでしまった。3度目は2000年の3月31日。脳梗塞。丁度、小淵元首相が倒れられる前日に小生が倒れ、ひと半月後に亡くなられたが、小生はその日に退院できて、翌日から職場に復帰できた。

仏の顔も三度までという言葉がある。小生も今度は寿命かと思うこともある。兎に角、死ぬまでは元気で生きようと思っている。

17 我が家の庭 DATE: 10/27/2005 09:04:10 PM

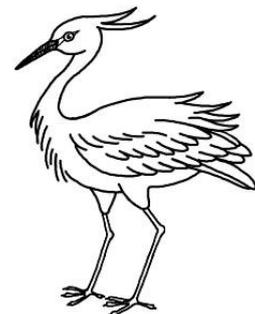
我が家の庭の池には今メダカが100匹くらい気持ち良さそうに泳いでいる。ホテイソウのおかげで水は比較的に澄んでいて居心地良さそうである。元はと言えば、この池で卵から生まれ、大きくなった金魚が20匹くらいいたのだが、或るときから一匹ずつ死に始め、遂には一匹もいなくなった。どうも、ヤゴが金魚の生血を吸い取ってしまったらしい。春先になると、この池からトンボが孵化して、気持ち良さそうにすいすいと飛び回り、家内の肩や指にとまったりしている。

我が家は昭和10年代から家内とその両親が柿の木坂に居を構えていたという。当時は海軍の軍人さんが多かったらしいが、1区画120坪位の広さの土地に、平屋建てが多かったようだ。今は、その1区画に4~5軒の家が建つほどに込み合った状態である。しかも大抵の家に車、それも外車が2台ずつ駐車している場合が多い。幸か不幸か、我が家は両親から小生と家内が相続したままとなって、最近では少し広すぎると感じもするが、所詮借地であり、特別な資産家ではない。

この庭は、小生が結婚した昭和34年頃から40年代の終わりまで、付近の子供たちの遊び場となっていた。夏の宵、肝試しとか、キャンプの訓練でのテント張り、さらには10人くらいの子供たちの宿泊の訓練などで賑やかな毎日であった。最近では、その子供たちがめっきり少なくなって、少子化時代を実感させられる。

この庭に、ある冬、一羽の鷺が飛んできて、庭の池の金魚を啜って飛び去った。多分、多摩川辺りから飛んできたのだろう。何回かその後も来るようになり仕方なく池に網をはって防戦したことがある。ある時、勤めていた会社でこの話を聞かせたら、段々に話が大きくなり、「加藤邸の池には鶴が飛んできたそうですね」となってしまった。作り話の好きな、愉快的な後輩であった。

それにしても、少子化問題は何とかしなければならぬ。目黒稲門会の皆さんも、仲人業の役目に少し力を入れませんか？

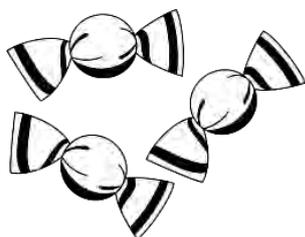


18 50年前の話 DATE: 11/26/2005 06:07:56 PM

目黒稲門会の三土会は、ずっと毎月第三土曜日の午後6時から開かれていた。場所は目黒清水町に近い鮎八であった。ところがこの10月頃から、おやじさんの体調がすぐれず、しばらく休業ということになった。幹事役の土川さんが後の場所を物色中である。おやじさんの健康回復と、一日も早い三土会の場所の設定を期待したい。

ところで、この鮎八の奥に小生が昭和28年から31年まで住んでいた話は今年の8月のホームページ(本書9ページ参照)で紹介しているが、この下宿での青春の思い出をもう少し残しておきたいと思う。下宿といっても、所謂下宿屋では無い。3人のご子息を育て上げ一人住まいとなった老婦人が、若い学生の為に部屋を借されたものである。こんな幸運に恵まれた学生はめったにいなかったと思う。部屋は日当たりの悪い8畳敷きであったが、それだけに机の前に座ったら、景色など見えず、本を読むほかには何も出来ない。よく言えば勉強するにはこれほど落ち着いた部屋は無かったと思う。この部屋で、同室の親友と良く歌を歌った。彼は多少の音痴であったが、聞くのも好き、自分で歌うのも好きで、ハモッタと思うと良くハズシ、彼曰く「お前のやつはハズレトル」。この下宿では、お風呂があって、オバサンは我々を先にお風呂に入れてくださった。あるとき、二人で風呂に入る前にオバサンが、大きな飴玉を一つずつ下させた。我々は喜んで口に入れて、舐めながら風呂に入る。大きな飴玉が歯とホッペの間にはまったら大変なことになる。風呂の中で歌を歌おうにも、口がまともに開け閉めできず、妙なるハーモニーを出す術が無い。「オバサン考えたなあ！」と思った。

隣家に女子大生がいる、風呂場はその隣家に一番近い場所にあつて、風呂の中での話し声は筒抜けに聞こえそうだ。隣家にとっては迷惑な話しである。オバサンは一計を案じ、我々が大きな声を出せないようにやんわりとご注意をされたのだ。隣家は某電機会社の社長さん。その娘が目白の日本女子大の学生であった。そして小生はその娘の弟の家庭教師をしていた。麻布中学の学生であったが、その中学生と勉強していると、時々彼女が紅茶を入れてくれたりしたこともあった。我が青春の甘酸っぱい思い出の一節である。



19 2005年の反省 DATE: 12/29/2005 04:57:50 PM

今年も後一週間で終わる。小生は一年間会長の随筆を続けてきたが、最近のことから反省を始めたい。それは、新宿稲門会の泰山木様へのお詫びである。一年半の間、泰山木様は小生の随筆を読んでいただき、その都度感想を稲門会のホームページの掲示板に投稿していただいていた。誰もが自分の発言に対して反応を頂くのは有難いことで、また書こうと言う意欲が沸いてくるものである。ところが、11月の随筆に、泰山木様からの反応がいつの間にか消去されてしまっていた。小生は、管理人役の中西千可子さんに我が稲門会のホームページに障害が起きてしまったのか？と思って、彼女に電話で問い合わせた。彼女の説明によると、泰山木様が出された文章に誰からも何の反応も無かったので、泰山木さまは自ら、この文章を削除されたと聞いた。会長も何か反応を出すべきですとご忠告を頂いた。パソコンの世界に限らず、人が何か発言したとき、何の反応も無いと言う状態は最もがっかりするものだ。そして、発言者の主張を無視するものであり、決してやってはいけない社会の常識でもある。

話は変わるが、昨年春、熊本日日新聞の元社長である永野光哉氏とお会いした時、リコー元会長の三善信一氏との交流に話が及んだ。三善さんは昨年亡くなられたが、小生をも含め郷里熊本の先輩であった。その三善さんはスナップ写真を撮るのが好きで、それを人に贈るの楽しみにしておられた。あるとき、永野氏は三善さんから一通の往復はがきを受取られた。そこに書いてあった内容は「先に送った写真は届いたか？ もし届いていなかったら再送するから、この返信用の葉書で着いたかどうか返事を呉れ。」というものであったと言う。先輩の後輩教育はかくしてユーモラスに行われた。

一年間の反省事項は多々あるし、最近の世相の混乱振りに一言口をはさみたくもなる。しかし自らの行動が最も基本的なところで、成っていなかった点を反省の第一としたい。そして、目黒稲門会会員の活発な議論と、懇親の輪の広がりを期待したい。

20 2006年はじめ DATE: 01/29/2006 08:19:27 PM

今朝、中西千可子さんから原稿の催促の電話を頂いた。「いつも、もう少し早く頂くのに今回遅いので、どうかなさったのでは」と心配された電話であった。今日明日中には出しますと返事をした。

さて、今回は「高倉健さん」との出会いを中心に書いてみようと思う。今朝は朝食を終え、先ずは健さんの最新作の映画「単騎、千里を走る」を観ようと、渋谷シネタワーにでかけてきた。我が家から100メートルもしない所に、渋谷行きのバス停があり、大変便利だ。この映画は張芸謀監督の作品で、舞台の大部分は中国雲南省麗江市、素晴らしい景色、孤独感、純朴な人々の善意。とにかく心に迫る物語であり、ここでは敢えてこれ以上のことは述べないことにしたい。皆さんも是非ご覧頂きたいと思う。

10年以上前、小生は富士通で国内営業部門の責任者として、宣伝部門も担当していた。当時、高倉健さんにはパソコンのキャラクターとして倍賞千恵子さんと共に活躍していただいていた。実際に小生が直接にお会いしたことは無かったが、当時小生が健康維持のために通っていた青山の或るスポーツクラブでひょんな事から健さんと知り合いになった。それは丁度、ある年の大相撲正月場所の頃だったと思う、そのクラブのプールで泳いだ後、テレビ放送を見ながら寛いでいたとき、健さんが小生のところにやって来られ「済みませんが、ガウンを取り違えていませんか？ たしかロッカーの鍵が入っていると思うのですが、、、」と遠慮深い姿勢で尋ねられた。ガウンのポケットを調べてみると、小生が脱衣所でサウナから出た後に、間違えていたらしかった。小生は恐縮して謝った。

このクラブに、健さんが時々見えていることは知っていたが、プライベートの時間はやたらに人と会話することは避けていた。小生はそのとき改めて自己紹介をして、パソコンの宣伝で健さんに大変お世話になっている御礼を申し上げた。健さんはびっくりして、「いや一宜しく願います」でその場は終わり。その後小生の失礼のお詫びにと思い、一度食事でも差し上げたいことを申し上げ、付き合いが始まった。

何度かお付き合いを重ねるうちに、健さんのお人柄にすっかり惚れ込んだ。小生が富士通を退任した時は、家内も含めて健さんにお招きを頂きご馳走になった。健さんは酒を殆ど飲まれない。彼に言わせると、自分は酒に飲まれる危険性があるので酒は飲まない。ほんのお付き合いにお猪口一杯だけと言う。俳優は体が資本だから健さんはスポーツクラブに通うのだと言っておられた。

今日、久々に映画の中の元気な健さんに出会い、その真摯な態度に改めて敬意を表する次第である。健さんは昭和6年生まれで小生と同世代、しかも九州出身で同郷。小生も負けないで健康に過ごしたいものと誓いを新たにした。

21 SPRING HAS COME DATE: 02/27/2006 06:27:41 PM

今年の冬は寒い日が続いた。北陸・東北地方の大雪も何十年振りかの記録を塗り替えるほどであった。東京の寒さも厳しく、我が家でも暖房費が嵩み、冷や冷やするほどであった。北側の車庫の屋根に長さ30センチ位のツララが出来て、遊び回っていた小学生らが歓声を挙げて喜んでいた。子供たちにとっては、東京の雪は久しぶりで寒さを忘れて雪と戯れていた。

昨日夕食時にガマ蛙の鳴き声が聞こえた。見るとテラスに1つがいのガマ蛙、まるで春の挨拶に尋ねてきたみたいだ。我が家には、毎年早春に庭の何処からかガマが出てきて池に卵を産み付ける、やがてこれがオタマジャクシとなり庭の池一面に元気良く泳ぎ始めるのだ。未だ、明日は雪になるかも知れないと言う予報に、2匹のつがいは凍え死ぬのではないかと心配になる。

冬から春への移り変わり、我が家の庭の季節に応じた変化は楽しい。正月前に、辛夷の葉が枯れて散ってしまった後、枝には小さな蕾、1月の半ばには水仙が咲き始め、2月の半ばになると良い香りを放つ。この水仙も球根を深く植えれば、背丈が伸びて長さ30センチくらいの大きさになるし、浅く埋めたのは10センチほどで花が咲く。大事に育てた子供が大きく成長するように思われるのは小生の感傷的な受け止め方であろうか？

昨年池で遊んでいたメダカは冬の間、1匹も姿を見せなかったが、ちょっと暖かな日になると一斉に姿を現す。前にも書いたように、やはり100匹くらいのメダカが元気良く遊びまわる。冬の間は池に埋めていた土管の中に退避して越冬するらしい。そう言えば、6年前小生が脳梗塞のリハビリのため入院していた病院の庭にも小さな流れにメダカが泳いでいた。自然の営みは人を慰め勇気づける。

春は確実にやってくる。

Spring has come. Cherry blossoms in full bloom.

これは小生が戦争中、旧制中学のときに読んだリーダーの一節である。



22 三綱領 DATE: 04/01/2006 01:33:07 AM

今年も早、年度末を迎えることとなった。去る3月1日、小生は熊本の母校「済々黌」の卒業式に参列してきた。小生は済々黌東京同窓会の会長をここ3年くらい務めているので、来賓として出席するわけだが、この卒業式は規律正しく如何にも快適である。今回は母校の卒業式に参列して感じた事を記したい。済々黌という名称をご覧になった方はハテ、何と呼ぶのだろうと思われるかも知れない。「セイセイコウ」と呼ぶ。古臭い呼び方と言われるが、別にそんなに古いわけでは無い。また、一般には藩校とされている場合が多いが、これも間違で強いて言うならば、藩校に反抗して出来たような私学で、明治時代に県立中学となり、熊本県下に多くの分校が出来、熊本高校も最初は第二済々黌として発足した。さて、その卒業式の模様だが、日の丸の旗と、伝統の黌旗が壇上に飾られ、国歌の斉唱・卒業証書授与・校長の挨拶・各種表彰状の授与・在校生の「蛍の光」・卒業生の「仰げば尊とし」の斉唱・そして我々も含めた参列者全員での「三綱領唱和、黌歌の斉唱」で幕を閉じる。

この三綱領は明治36年に当時の黌長の佐々友房が示した生徒に対する行動規範であり、全員が蛮声をふりあげて叫ぶ。

倫理を正しゅうし、大義を明らかにす。

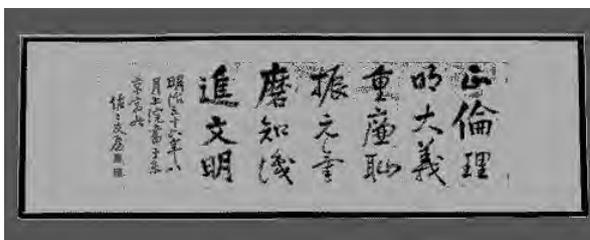
廉恥を重んじ、元気を振るう。

知識を磨き、文明を進む。

東京での年一回の同窓会総会の際にも参列する同窓生は大真面目にこの三綱領を唱和する。最近の日本人の品格を忘れた行動、見るに耐えない、聞くに耐えない官民の行動に接するたびに、この三綱領を大切に唱和する済々黌の生徒、同窓生がこの行動規範を大切に守る事を誓い合いたいと思う。

(蛇足)

三綱領の3番目、「磨知識進文明」を極めるのに時間がかかり小生は早稲田大学に入学するのに2年間の浪人生活を送った。



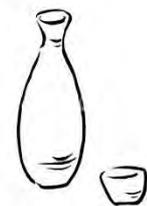
23 ポリープと酒 DATE: 05/01/2006 01:18:34 AM

先日、大腸と胃のポリープの検査する羽目となった。手術者は小生の甥で、念の為に検査をと言う。小生は過去に肺炎と声帯ポリープと肺結核と脳梗塞を経験しているので、大腸や胃のポリープの検査と言われても大して驚かない。それに、お尻の穴に器具を突っ込んで検査するのは、小生の甥の得意技らしいので、安心して任せた。

脳梗塞は6年前のことであり、その後も酒は一日も休まずに晩酌を続けているが、この検査と摘出後はしばらくおとなしくしていると言う。今日で酒を断って2日、この週末を過ぎれば解禁となる。酒が飲めなくては、この原稿を書くにも何となく力が入らない。

酒と言えば、小生は阿蘇山の麓の造り酒屋の次男坊として産まれた。だから、酒を飲むのに罪悪感みたいなものは微塵も無い。小学生の頃から塩鮭には酒をたっぷりかけて塩出しをして食べていた。最近日本酒の人气が落ちて、焼酎が人气が上がっているようだ。小生の感覚では、焼酎も最近では味も香りも無い、アルコールのようなもの、しかも25度程度の薄いのを氷で割ったり、お湯で割ったりして、味も素っ気も無いのが好まれているようだ。要は、酔った気持ちの良さを楽しみたいための一杯であるようだ。小生の場合は中国のマオタイや沖縄の泡盛、球磨焼酎などのように独特の香りと味を楽しみたいものと思う。

昔、国会で焼酎の税率を引き上げる問題が議論されているなかで、多分左派議員の中からだったと思うが、「庶民の酒、焼酎の税率を上げるのは、如何なものか？」と言う発言があった。ときの竹下大蔵大臣が「古来、日本の酒は日本酒であります、焼酎ではありません。」と言う発言をされ議場の爆笑をかったのを思い出した。当の竹下氏は島根県の造り酒屋のご出身であった。今、小生は4月が早く終わらないものか！とひたすら願っている。



24 プール DATE: 06/05/2006 11:27:15 PM

今年の5月の気象は異常であった。本来、爽やかな月の象徴であるのに、まるで梅雨のような日々だった。今日31日になってやっと日本晴れの朝を迎えた。昨日は、東根小学校の運動会。孫が小学校の4年生で、先週の土曜日5月27日が本当の予定日だったが、翌日曜日にも雨、結局3日遅れての運動会であった。前日の天気予報とは違い、結局雨は終日降らず午後からは日差しが眩しかった。小学生達は、元気にプログラムをこなして行った。それにしても東京の小学校の校庭の狭さには驚く。小生の育った郷里の小学校のトラックは200メートルはあった。そして100メートル競走は直線で走れる別レーンもあったし、バスケットボールやバレーボールの場所もあった。都会の子供は可愛そうだと思う。十分大きくなった6年生の競争が75メートルと、、、もっと発育が悪かった小生等でも6年にもなれば200メートルは走ったものだった。そう言えば、昭和19年の旧制中学の入学試験では、1,500メートルの走力検査と、鉄棒での懸垂5回が合格の基準だったと思う。

さて、今回の随筆の納期は今日だ。今頃中西千可子さんが、未だか未だかとイライラしている事だろう。今回は小生が5年前から始めている水泳にまつわる話をしようと思う。小生は6年前の3月31日、脳梗塞に倒れた。幸い手当てが早く適切であったため、一月半で退院復帰できた。1年後リハビリの為に、近所に出来たスポーツクラブに入会し、水泳を始めた。現在は週4～5回はプールに行き、1,000メートルをクロールで泳ぐ。お陰でウエストが6センチ細くなり、体重も64キロ前後をキープできている。元々、心臓の不整脈に起因した脳梗塞であったため、この歳になって無理は利かないので、25メートル毎に呼吸を整えながらの1,000メートルは消化するのに45分から50分かかる。実はこの小休止の時間が、一緒に泳ぐ人達との交流の場となっている。楽しいのだ。小生と同じクラブに外岡明さんが元気に泳いでおられる。氏は小生よりずっと年上であるのに、1,000メートルはノンストップである。従って30分くらいの間、誰とも話さず黙々と泳がれる。クロールでイルカの如くゆったりとしたフォームは小生の憧れでもある。

あるとき、一緒に泳いでいる美女と小生が話しをしていたら、外岡さんが羨ましそうに小生に話しかけられた。あの人だれ？ どんな関係？、、、等。お陰で、小生には多くのガールフレンドができた。

25 サマータイム DATE: 07/03/2006 04:17:07 AM

昭和20年の敗戦後、多くの変革を乗り越えて我が日本国は世界第二の経済大国に成長することが出来た。そこには改革と言うより、革命とも言うべき変化があった。農地解放や、財産税の徴収、今も続いている相続税の制度などは正に共産革命とも言うべきものだと思う。

これかからの話は、そんな難しい話をするつもりでは無い。冒頭のサマータイムについての感想である。確か昭和22年か23年頃の事だったと思うが、夏の日照時間を大事に使おうと言う趣旨で当時の進駐軍の指導で始まった事であろう。とにかく、陽の長い夏の間、1時間早く起きて太陽の恵みを有効に活用しようと言う制度である。ヨーロッパやアメリカの多くの州で活用されている習慣である。旅行の時は気をつけないと思わぬ失敗を招く場合がある。

我が国でも、この制度の採用には賛否両論があるが、小生はどうも賛成しかねる。終戦後昭和25年まで、小生は熊本で生活していた。東京と熊本の間には約40分から50分の時差がある。何せ友人たちと遊んでいて、ちょっと薄暗くなったと思うと、直ぐ21時頃になってしまうのだ。日本は北海道から、沖縄までには約1時間の時差がある筈だ。これには勉強の時間が直ぐに足りなくなるのだ。しかし、サマータイムからレギュラーな時間に戻る日は、1時間多く睡眠時間をとる事が出来て嬉しかったのを覚えている。人間の体内時計は25時間と言う説もある様だから当然の感覚だろう。東京で体験すれば、別の感覚を持っていたらと思うが如何なものだろうか？

ところで、お隣の中国にはサマータイムどころか、東西にも広い大きな国でありながら、国内には時差は無く東経75度から135度までを一つの時で管理しているのが現状らしい。皆さん、こんな環境での人々の生活感を考えた事ありますか？



26 第7回定時総会、会長挨拶 DATE: 07/03/2006 04:19:16 AM

本日、目黒稲門会第7回総会を迎えるにあたり、会長として一言ご挨拶申し上げます。本日は、ご多忙の中を、早稲田大学から副総長の小林栄一郎さん、125周年関係の広瀬さん、稲門祭関係で荒川稲門会の小太刀昌雄さん、大田稲門会から佐藤裕彦さんも態々ご出席を頂きまして、有難うございました。どうぞ我が会員とご懇談頂き、時間の許す限り楽しんでいただけたらと思います。

さて、1月の新年会から早や半年が過ぎ、月日の経つ速さを今更のように感じてしまいます。これではアツと言う間に2006年が終わってしまうのではないかと思います。仕事を止めて、毎日が日曜日をどう過ごすのか？と思案投首では生きている意味がありません。充実感を感じながら元気に過ごしたいものと思います。幸い我が目黒稲門会には多くの部会が出来ていて、後ほどご紹介もあるはずですが、大いに活用して頂きたいものと思います。正に多士済々の会員諸氏の活動には、他の稲門会からの参加もあるやに聞いています。

何事をやるにも大事な事は、健康の維持だと思えます。私も大病の経験者で、それも2回。家族は勿論、仕事場でも多くの人にご迷惑をお掛けしました。70歳直前に一切の仕事を止め、目黒稲門会に入会させていただきました。2年前に会長にご推挙いただきましたが、何とかこの2年間皆様の絶大なご協力により、東京23区の中のひとつの稲門会として6年を経過する事が出来ました。皆様のご協力の賜物と感謝いたしております。

この1年間に何人かの新人が入会されました。これからは、所謂団塊の世代の人々が、企業戦士としては卒業して、新しい職場を創造したり、あるいは今問題となっている我が国を「品格ある日本」とすべく、社会に貢献する気概をお持ち頂きたいと念じています。来年は早稲田大学125周年の記念すべき年となります。目黒稲門会もその一翼を担ぎたいものと思います。

27 盛夏とカラオケ DATE: 07/30/2006 09:59:46 PM

長かった今年の雨もようやく終わりを告げそうだ。夏の暑さは、湿気さえ低ければ爽やかなもので、これからの8月は素晴らしい夏であって欲しいと期待している。この7月は雨ばかりで、つい好きなゴルフにも行かずじまいとなってしまった。代わりに、28日間に22回水泳を楽しんだ。1回を除いて毎回1,000メートルをノルマとして泳いだ。3レンチャンの夜の飲み会をこなせたのも水泳のお陰だと思っている。二日酔い気分の日も、プールに入るとすっきりした気分になる。ただ、己の歳を考えると、これ以上の無理をしてはいけないと思う。

8月は我が目黒稲門会の役員会も夏休みであるが、我が海口部会長のカラオケの会は今月も11日に開かれる。殆どが60歳以上の第二の人生の人達だが、毎回時間オーバーのサービスを受けて、みんな大声を上げて楽しんでいる。歌う歌は殆どが懐メロであり、その昔を思い出しながら、真剣に自分の歌声に酔っている。たまに小生がアメリカンポップスを英語で歌うと、決して評判は良くない。「日本語で歌え！」と言う野次がとんだりする。俺の名前は(エイゴ)だ！とやり返す事にしている。老いも若きも一緒にご参加を！言いたいところだが、稲門会の会員に若い人が少ないのと、歌う歌が年齢差で相当に違うと思われるので、今の状態が最高なのかもしれないと思って、毎回楽しみにしている。

それにしても、海口さんの心遣い。一人一人の歌詞ナンバーを記録され、毎回一人一人に配っていただくサービス。大野夫妻、特に奥様の飲み物や、おつまみなどのサービスには頭が下がるばかりだ。

とにかく、好きな歌を大きな声を上げて歌って楽しんでいけば、8月の夏の疲れも何処かへ跳んでいってしまうだろう。



28 早稲田実業の全国制覇 DATE: 09/03/2006 12:23:32 AM

今年も8月が過ぎようとしている。8月は日本国民にとって最も悲しい月である。61年前終戦を迎えた。昨年もこの随筆に終戦のまつわる思い出を載せさせていただいた。

今年は特に暑い夏であったが、毎年の鎮魂の祭礼だけでなく、恐らく甲子園の高校野球の激戦振りには過去の旧制中学の大会をも含めて始めてと思われる熱戦が展開された。我が早稲田実業の全国制覇は苦小牧駒沢との再試合を含め、数々の逸話を作った。クールな斉藤投手の全試合での力投、敵のバントを失敗させた捨て身のワンバンドの投球、クールなハンカチの王子様という綽名まで付けられた。

決勝再試合の当日、テレビで自宅で観戦中の小生に目黒稲門会のメンバーの石川智子ちゃんから、電話が掛かった。彼女は現役の某社で活躍中であり私用の電話はご法度のはずと思ったが、今日は勝っても負けても目黒稲門会で祝賀会をやろうと言う提案の電話だった。今、会社に10分間の暇を貰って小生に提案をしているところだと言う。小生は今日の今日では、中々人が集まらないだろうと思った。彼女は目黒駅のそばの20人くらい入れる飲み屋さんをとりあえずおさえておいた。どうやって会員に連絡したら良いだろうかと言う。

小生は「三土会の世話役で我が会の副幹事長の土川さんが一番適任だけど、彼は携帯電話を持っていないから連絡が難しいかもしれないと思う」と返事をして置いた。試合は熱戦となり、ハラハラしながらの闘いをテレビで観戦していた。試合が終わって、外岡先輩から電話。今夜、静安(目黒稲門会役員会の夕食会の中華料理屋)で祝賀会をやるという連絡がきたけど、加藤さんどうする?と言う。勿論行きますが、今日の今日だから、あまり人は集まらないでしょうと応えて、2人で目黒駅行きのバスに乗った。静安について驚いた。何と20人くらいメンバーが既に集まっていて、小生が到着する前から、ジョッキを挙げていた。結局22人の人達が集まった。智子ちゃんが一番最後に現れた。現役は忙しいものだと今更ながら感じ入り、感謝の念を深めた。

29 9月の終わりに DATE: 09/30/2006 01:35:50 AM

今日は9月29日、明日で1年の三分の二が終わる。去る26日、安倍晋三総理が誕生した。52歳と言う。美しい日本と言うキャッチフレーズであるが、是非その名に相応しい舵取りをお願いしたい。

さて、今月は元早稲田大学総長の小山宙丸氏が逝去された。いつぞやのこの随筆に同氏が現役の総長時代に、慶応の湘南キャンパスのオープニングの式典でのユーモア溢れる祝辞の内容を披露した。宙丸さんは我が目黒稲門会の顧問でもあられた。残念ながら、小生が会長を勤めている間、一度もお目にかかる機会が無かった。残念なことであったが、ここに改めてご冥福をお祈りしたい。

今年は気候不順、何時までも暑さが続き、雨も多かった。しかし暑さ寒さも彼岸までと言うように、日が暮れてからの涼しさは格別で、窓を開ければ涼風と虫の鳴き声に、寝つきもさわやかである。彼岸花は彼岸には必ず咲く。我が家の庭にも、勿論皇居のお堀の塀にも毎年咲くのを、現役の頃、車の中から眺めていたのを思い出す。自然は未だ、十分生きている。手遅れになる前に、地球環境の保全に全人類が努力しなければと思う。

さて、10月24日は我が目黒稲門会の秋季ゴルフ会である。大野部会長から計画の詳細が送られてきた。出場は24人、参加者はもう指折り数えて楽しみにしていることだろう。小生は、去る27日に大厚木カンツリーで楽しんできた。現役時代の会社の後輩で、八雲と平町に住む一回り若い3人と一緒であった。若いと言っても小生が75歳だから、彼らも60歳を越えて、第一線は卒業した連中である。ゴルフ終了後の反省会は新橋の烏森まで、足を伸ばした。この店は75歳になる夫婦二人が、46年間続けてきた焼き鳥屋で9月29日で店仕舞をすると言うのだ。老夫婦と昔話をしながら、一通り食べ終わっても未だ、20時になっていない。もう一軒行こうと4人は直ぐに気が合い、西銀座方面へ21時までという約束で行ったが、結局家に帰ったのは22時半になっていた。



30 姉の三回忌から DATE: 10/31/2006 07:37:37 AM

去る10月7日、姉の三回忌で熊本に帰省してきた。姉は1914年生まれだから、小生より17歳上になる。6人の子宝に恵まれていた。姉の嫁ぎ先は、戦後御多分に漏れず財産税やら、農地解放の荒波に直面し、6人の子供たちを抱え苦勞が耐えなかったと思う。戦後たまに小生が姉の家に遊びに行っても、家中が綺麗に片付いていたことは無かった。しかし、この6人の小生にとっては甥一人姪5人の子供達は大家族の中で揉まれて育ち、熊本に一人、首都圏に4人、ドイツのデュッセルドルフに一人と、それぞれが一家を構えて楽しそうに暮らしている。

さて、安倍総理が誕生して、美しい日本、その大切なポイントとして、教育基本法の改正が叫ばれている。ところが、最近富が目立つのが、子供のいじめとか、自殺。高校の必須科目の無視とか、良からぬ話題がNHKのニュースを始多くのマスコミで頻繁に流れている。これらのトラブルは学校の教師に責任の一旦があることは確かだろうが、やはり社会の必然として現れてきた現象に思えてならない。戦後60年、ぬるま湯に浸かっていた我が国は、あの戦後の貧困から脱皮し、経済的には世界第二の大国に躍進したが、精神的には如何にもひ弱な国に成り果てたのではなからうか？

今朝、国会中継で衆議院教育基本法特別委員会議をやっていたが、大島理森議員の発言に「外部化」という言葉があった。昔はもつと親を中心として、祖父母、兄弟姉妹、叔父叔母と言ったように、家族が皆で育てたものだった。決して先生だけに責任を擦り付けはしなかったと思う。この外部化という言葉は、子供の教育だけでなく、一般の企業にも当てはまる現象だ。経済の合理性を追求するあまり、外注に過度に依存した企業は真の力を損なうものだ。中国で女性用のブーツを作る工場で働く中国人女性労働者の1ヶ月間の給与は僅か2万円だと言う。今、我が国では中国に、インドにと労働力を依存している企業が多い。小生は自分が過ごしてきた現役の時代を振り返り、子供の教育までもが！と恐ろしい時代が来ているなあ、と背筋が寒くなった。

31 今年もあと少し DATE: 12/01/2006 06:21:40 AM

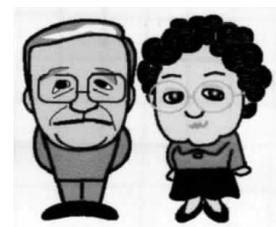
11月に入って間もなく、年賀状欠礼の挨拶状が届き始めた。「もう今年も終わりか！」と、月日の流れは歳と共に速くなって行くのを感じる。この欠礼状のを見ると、母親の場合は大抵90歳を超えているのに対して、男性の場合は70台、80台が多いようだ。小生の両親の場合も、親父が83歳、母は103歳だった。また、奥様に先立たれた場合、残された夫は数年の寿命で終わる場合が多いようだ。どうも男性は一人では生きていられないのが定説のようだ。女性は強い。

さて、この11月には、東京熊本県人会の総会と懇親会が赤坂プリンスホテルで開かれた。600人を越える出席者で、盛会裏に終了した。小生は目黒稲門会の会長の他に、熊本県人会の副会長と、済々黌東京同窓会の会長を勤めている。前にも書いたが、小生は70歳になる前に脳梗塞に倒れ、以後は現役を退き、専ら学生時代の同窓会関係の仕事にのみ関係している。皆旧友であったり、また若い人達も含めて、楽しい関係のお付き合いをさせていただいている。

今朝の日経新聞の春秋欄で11月30日は「老いらくの記念日」であることを知った。実業家歌人の川田順が「墓場に近き老いらくの恋」と歌った話。川田が39歳の俊子さんと一緒になったのは、67歳のときであったと言う。そして、彼は84歳まで、俊子は96歳まで生きた。「天寿に恵まれた二人は高齢化社会の先達だろう」と結んでいる。

昨日、我が目黒稲門会のメンバーである、榎本茂氏の御通夜に出席してきた。榎本氏は76歳、小生の1年先輩でしかない。あまりにも若死にはではないか？と思うと同時に、俺も男としては最後に近くなったのか？と妙にしんみりとして、我が家で一杯やりながら故人を偲んだ。

さー、みんな元気を出して後10年は頑張ろうではないか！



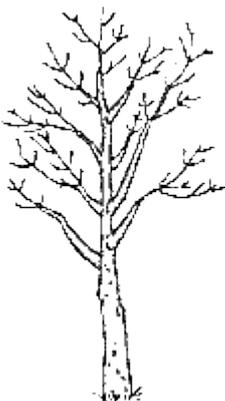
32 庭の辛夷(こぶし) DATE: 12/31/2006 07:38:03 PM

我が家の西南の一角に大きな辛夷の木がある。目黒区の保存樹に指定されていて、我が家には区から年間6,000円の保存樹としての手当てが支給されている。12月になるとすべての葉が散ってしまうが、その後にはちゃんと3月の春先に向けて、今からもう蕾みが膨らんできている。これから一番寒くなるというのに、季節は確実に冬から春への準備をしている。桜が咲く前に、この辛夷が真っ白な清楚な姿を見せてくれるのが楽しみである。

だがしかし、11月後半から葉っぱが色づきやがて落ち葉の季節となる。この時季の落ち葉は音を立てて近所に落ちていく。我が家の南隣りは目黒稲門会の市瀬さんのお宅である。枯葉は木枯らしに乗り、多くが市瀬家に向かう。風向きこの季節、北風だから仕方がない。市瀬さんはこの落ち葉の掃除に大変苦労されていると思うが、さすがは大人。たまにこのことを話題にすると、あのニコヤカナ笑顔を見せて、季節感が楽しみですよと笑い飛ばされる。良き隣人に恵まれたものだと思っている。

今年もあと一週間。先日我が国の国連加盟50周年記念式典の模様をテレビ中継していた。昭和20年の敗戦以来、我が国自身は一度も戦火にまみえることも無く、これまで平和を謳歌してきた。北朝鮮の核廃棄問題を中心に6ヶ国会議が先週久しぶりに北京で行われたが、なんらの成果も無く中断と言う結果に終わった。世界はソ連の終焉以来、東西冷戦は終わったものの、平和な世界にはほど遠い環境である。国連の分担金がアメリカに次いで我が国が多い、その癖に安全保障理事国にもなれない情けなさを嘆きたくもなる。他国の核廃絶を叫ぶ大国がみんな核保有国であるのも皮肉な現象である。その一方で、世界の環境は明らかに破滅に向かっていき、我が国の少子化問題、家庭、家族の崩壊現象も正に現代のイソップ物語である。

2007年、平成19年が転換の年になってもらいたいものだと思う。その為に我々は今、何をなすべきだろうか？



33 平成19年の1月は斯くして過ぎた DATE: 02/06/2007 05:25:29 PM

皆さん、平成19年明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします。

1月8日、我が目黒稲門会の新年会は駒場エミナースで開かれた。早稲田大学から前総長の奥島隆康氏を迎え、80人を越える参加者で大いに燃え上がった。奥島先生唄う愛唱歌「人生劇場」は、正に早稲田大学の正月に相応しい歌声であった。明日から大学の講義を持っておられるという先生を、二次会にお誘いするわけにもいかず残念であった。小生は二次会まで、しかし三次会に流れて行った稲門会の猛者達の話も後で聞いて歳の割に元気な先輩達に脱帽。

12日のカラオケ部会の席は別件があり残念ながら欠席。22日のよん月会は30人を越える会員が出席した。今回初めてと言う会員もいた。いつもの倍くらいの出席者で話しが幾つにも割れてしまうのが、問題と言えば問題であったが、楽しい会であった。ここでも、終わって幾つかのグループに分かれて二次会に流れた。実はこの日は阿部相談役の奥様の御通夜であった。今年初めての元三土会。この日止めるわけにもいかず、翌日の告別式に参加させていただいた。阿部さんは昭和19年の早稲田の卒業生である。この歳になって最愛の奥様に先立たれる寂しさは、想像もつかない。お焼香の後、阿部さんと思わず握手を交わした。一日も早く元気を取り戻され、目黒稲門会の色んな行事にご参加いただきたいと願うのみだ。

24日には、家内と久しぶりに東急 Bunkamura のル・シネマに行って、「ヘンダーソン夫人の贈り物」と言う映画を鑑賞してきた。久しぶりに洒落た、そして涙が出るほどの映画だった。第二次大戦の最中、舞台はロンドン。ナチスドイツの爆撃の最中にも、屈しないイギリス人の強さ、そして建物を始め石の文化を強烈に印象づけられた。空襲のときは地下室にいたほうが安全だと言う習慣。日本の多くの都市は焼夷弾で焼き払われたことを思い出すと、紙と木だけで出来た日本の都市の脆さと、これを破壊するのにも、アメリカは簡単だったんだらうなあーと、映画とは関係ないことをも感じた。

さて、27日は渋谷区松涛の戸栗美術館での古九谷焼きの美術鑑賞会。久しぶりに出席した。数ある部会の中で、こんなに多くの会員が出席される部会はない。部会長の八幡さんの博学さと情熱に先ずは敬意を表したい。この九谷焼は石川県のもので小生は聞いていたが、元は、佐賀県有田町の伊万里焼のものであるという説が強くなっていると言う。そう言えば、石川の土には濁りがあり、真っ白な色に焼き上がらないようで、その為に全体に濃い色に仕上げていると聞いていたのだが、、、。小生は日本酒が好きで、杯は純白の地に注がれた酒の色を眺めるのが好みである。並べられた陶磁器は豊富な色で塗り固められたものが多く、これらは、食べ物を載せるお皿ではなく、飾って楽しむものであろう。別に、ケチを付けている積りは無いが、小生にとっては、白地に藍色の焼き物が生に合う。そういえば、ドイツのマイセンの焼き物も、オリジンは日本を含めた東洋の影響を受けたものと言う話を聞いたことがあったようだ。

28日(日曜日)NHK の夜の番組、NHK ペシャル。インドの衝撃は兼ねてから聞いてはいたが、故ネルー首相の頭脳立国の成果には正に衝撃を受けた。10億以上の民が今や、世界的知的生産物の大きな部分を担うこととなりつつある。貧困と戦いながら、窓の無い教室で雨に降られ、傘を差しながら勉学にいそむインドの若者達を見て、昭和20年、敗戦後のわが身を其処に見た気がした。正に同じ境遇だった。そして今我が日本の将来は？

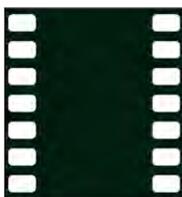
34 春が来た？ 映画の季節？ DATE: 02/27/2007 12:42:58 AM

先週末、久しぶりの雨の夜、我が家の庭でガマガエルの鳴き声が聞こえた。そっと庭先に出て覗いてみたら、2匹のガマが池の近くにいるではないか！ この寒さは未だ彼らが出てくる時期ではない筈なのに。翌日曜日の朝、庭の池を覗いてみたら、ちゃんと2匹のガマが泳いでいる。未だこれから雪が降るときもあるだろうと思われるが、それでも卵を産みつけるのだろうか？ 一方、同じ庭の梅は満開を過ぎてしまい、目黒区の保存樹に指定されている辛夷の小枝には、小さな白い蕾が綻びかけている。未だ2月、辛夷は桜の前に咲くが2月に咲くのは珍しい。確かに異常気象だ。

そんななか、NHKのBS放送で映画鑑賞が楽しめる。先日、往年の名画「第三の男」を見ることが出来た。主役のオーソン・ウェルズは全体の中でわずか9分しか顔を見せないと言う解説に改めてなるほど納得。第二次大戦終了直後、4ヶ国の管理下にあるウイーンの街が舞台。撮影されたのも終戦後間もない時期だった。何もかも不自由な時代に、よくもこんな素晴らしい映写効果を見せてくれたものだ。それにしても、ウイーンの街の下水道の立派なことに思わず唖ったことを、思い出した。石造りの文化、都市の作り方というものに感激していた時代を懐かしく思い出した。

また、この映画の音楽にオーケストラは使われておらず、アントンカラスのギターのための「第三の男」の旋律が最初から終わりまで、実に効果的だ。そして、主役の一人のアリダバリの、細長い顔、鋭い眼の美しさ！ 改めて、某氏が惚れて結婚した日本人女性（一昨年亡くなった）がこのアリダバリであったのを、今更のように思い出した。終戦後の学生時代に見た映画であった。

翌日の映画も懐かしいモノクロの、こちらはギターの名曲にのって流れる少女と少年の悲惨な物語一禁じられた遊び一であった。BS放送で見る内外の名画は、特にこの冬の時期、楽める。「寅さん」も素晴らしい。映画バンザイ！



35 春宵一刻直千金 DATE: 03/29/2007 03:51:02 PM

先月の logbook の随筆に原稿を書いたのは、2月19日で、その折に「我が家の庭でガマガエルの鳴き声が聞こえ、2匹のガマが早くも池の近くにいるではないか！ これから未だ雪が降るときもあるだろうと思われるのに、産んだ卵は皆死んでしまうだろう。それでも卵を産みつけるのだろうか？」と心配した。一方、同じ庭の梅は満開を過ぎてしまい、目黒区の保存樹に指定されている辛夷の小枝には、小さな白い蕾が綻びかけている。未だ2月、辛夷は桜の前に咲くが2月に咲くのは珍しい。」と書いて異常気候を心配した。そして今日は3月29日。我が家の庭の辛夷は長持ちしていたが、さすがに今は半分以上が緑になった。それでも辛夷は3週間くらい清楚な花をつけていた。一方、庭の池には無数とも感じられるオタマジャクシが元気よく泳いでいる。メダカも100匹位が冬を越し、よく見ると1センチにも満たない稚魚が泳いでいる。斜め前の家の大きな桜は殆ど満開。この春の三寒四温は、我が家の春を丁度良いタイミングで展開してくれたようで、確実にこの目黒柿の木坂の春をタイミング良く形作ってきたようだ。

2月の末から今日まで、目黒稲門会の諸行事、故郷の濟々鬘の卒業式、同期会の会食、阿蘇高森の小学校時代の友人達との会合など、懐かしい旧友達との久しぶりの飲み会を楽しんだ。小生は阿蘇高森小学校に6年、熊本の濟々鬘に6年、早稲田大学に6年を過ごし、18年間の学生生活を楽しんだ。小学校時代の友人に獺師が居る。この友人から自分が仕留めた猪の肉を貰ってきた。どうやって料理しようかと目下思案中である。今年は、猪の歳である。やはりしし鍋にするのだろうか。目下我が家の冷凍室に保管している。

3月10日の上野でのオルセー美術館展は素晴らしいものだった。いつもながら八幡和三郎氏の行き届いたご案内には頭が下がる。それにしても印象派の画家達の作品は実にロマンチックで文句なしに楽しめる。

19日の日曜日には、外岡先輩のお勧めで、早稲田グリークラブシニア会のコンサートに出かけた。何と90歳を越えるメンバーも居られて元気な皆さんの妙なるハーモニーを楽しんだ。

26日のよん月会は会場一杯の参加者、新しい会員も3名出席されて、大いに盛り上がった。呑川の畔、灯りに照らされた桜がチラホラと見えてきて、飲みつかれて帰宅する会員の気持ちを高揚させ、二次会へと足を運ぶのか、、、。春は楽しい。

36 缶ビール・燗ビール DATE: 04/29/2007 07:15:29 PM

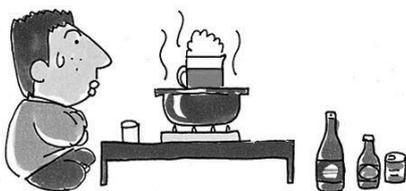
最近、日本のビールが美味くなってきた。自由化ということは誠に消費者にとって有難いことだ。

古い話で、若い人たちにはそんな事があったのか？と思う人たちも居るかもしれない。日本酒の世界では、特級酒、一級酒、二級酒などに区分して価格が決められていた時代があった。戦前戦後の統制経済の時代である。これは酒税を決める為の手段に使われていた。極端に言えば、美味さとは別に含有アルコールの度数などを基準に等級が決められていた。地方に行くと意外と二級酒が美味しいぞ！等の声が聞かれたりもしていた。酒税は国家の貴重な財源となっていた。全国各地の地主が小作米を使って酒を醸造する習慣があったので、日本酒の醸造は鹿児島などの南国を除いて日本各地で広く行われていて、大事な財源となっていた様だ。そして酒屋は各地の税務署の厳しい監督下にあった。

戦後、経済発展と共に色んなものが自由化されて行った。日本酒も美味しいサケがドンドン出ているが、冒頭に述べたビールも、最近のサントリー・プレミアムビールなどに代表される、味を楽しめるビールに成長してきた。小生のような、愛酒家にとっては誠に嬉しい限りである。

さて、美味しく飲む時に大事なことがある。ガンガン冷やしたビールをガーツと一息に飲む爽快感を楽しむ人が多いが、小生の場合はちょっと違う。ビールも酷のあるヤツを飲む時は、温度が大事だ。冷えすぎたビールでは味が判らなくなる。ざっと云えば、常温で飲むのが一番だと思う。酒屋さんやコンビニで買うビールは大変親切なことに冷蔵庫で冷やしてある場合が多い。これをそのまま飲んで風味が分からないどころか、胃腸にも良い結果をもたらさない。

小生は缶ビールを買ってきて、湯煎をする。ポウル(ドンブリでも良い)にジャーからお湯を注ぎ、缶ビール全体1/3程度がお湯に浸かる程度にして適温となるのを待つ。温度計で温度を測ってみては居ないが、湯煎のためのお湯が少しぬるくなる程度、素手で触っても暑すぎない程度になる頃が丁度良いようだ。缶は熱伝導が良く、アツと言う間に最適の温度になる。長すぎると泡だらけのビールになるから要注意である。



37 スリそして酒の歌 DATE: 05/30/2007 10:40:51 PM

平成3年の秋頃、小生は新幹線のグリーン車でスリにやられたことがある。当時小生は富士通の国内営業部門の責任者として、前期の売上額が予算をクリアできるかと一生懸命であったが、やっと目途がついて、顧客との会合に沼津工場に出かけた。

東京駅から新幹線に乗車し、雑誌を見ているうちに、うっかり居眠りしてしまっていた。しかも上着を窓際にかけてたまま、、、。列車は小田原の駅に正に到着しようとしていた。イケネー！、こういう時にスリにやられるのだと思って上着に手をかけてみると、ポケットの財布が無い。グリーン車はガラガラに空いている。丁度車掌の姿が見えたので、その旨を伝えた。まもなく列車は小田原に到着。車掌が降車客の方へと急ぎ足で探し回ったが後の祭り。

沼津駅で降りて、とにかく交番に飛び込み、事情を説明。警官は若い新人らしく、極めて要領が悪く、下手な字で何度も書き直しながら調書を仕上げた。調書と言うものは、警官が書くものらしく小生には何も書かせない。まどろっこしくて、警官に怒鳴りつけたくなった。キャッシュ以外は損害は無かったのは幸이었다。

そしてこの日、沼津の若山牧水記念館を訪問するチャンスに恵まれた。今回の話はここで出会った牧水の「酒の歌」の紹介である。牧水記念館は千本松原のそばに昭和62年にオープンしたのだそうだ。「白玉の 齒にしみとほる秋の夜の 酒は静かに飲むべかりけり」この歌は大抵の人が知っている。実に爽やかな、酒を愛でた、そして牧水と言う人柄を表した名句であると思う。小生はこの牧水記念館で「酒の歌」と言う豆本を見つけた。帰りの新幹線の中で読みながら抱腹。何しろ酒に関する牧水が詠んだ歌365首がアイウエオ順に並んでいるのだ。翌日、早速この記念館に200冊を注文した。

牧水は宮崎県に生まれ、我が早稲田大学出身の大詩人である。無類の酒好きで正に酒仙、晩年は飲みすぎが祟って、故郷に帰り若くして一生を終わる。幾つかの名句(謎句)を紹介しよう。

- ・足音を忍ばせて行けば台所にわが酒の壺は立ちてまちおる
- ・酒なしにこのおくりものを食らうこと神に唾はくこちこそすれ
- ・それほどにうまきかと人のといたらばなんと答えむこの酒の味
- ・ウイスキーに煮湯そそげば匂い立つ白けて寒き朝の灯かげに
- ・あな可愛ゆわれより早く酔いはてて手枕のまま君ねむるなり
- ・この女夜ごと日ごとの乱酔に衰えてなほわれを離たず
- ・数知れぬ女の肌に溺れたるこの若き友は酒を好まず
- ・酒やめてかはりになにかたのしめといふ医者かつらに鼻あぐらかけり

最後に壮絶な句を！

- ・飲むなと叱り叱りながらに母がつぐうす暗き部屋の夜の酒のいろ

(蛇足)

これらの歌を小生は楽しんでいろんな人に紹介していたところ、15年位前にあった先輩から「牧水は酒の飲み方を知らない男だった。あんな呑み方をしてはいかん。俺は好かん」と言った先輩が一人いた。

38 今年も半年が過ぎた DATE: 06/30/2007 08:37:53 PM

今年も半年がまさに過ぎようとしている。小生も目黒稲門会会長としてこの3年間、本当に恵まれたものだと思う。母校には苦しい事象も発生したが、125周年という記念すべき年に、スポーツ分野では素晴らしい成果を挙げている。野球、スケート、ピンポンなど、世界的な名選手に恵まれ、毎日が楽しさに溢れている。神宮球場には小生も、早法戦を除いて毎回観戦に出かけた。松岡雅俊氏の御配慮で約20人の会員がネット裏に陣取った。小生にとっては神宮球場に出かけるのは、約50年ぶりであった。斉藤佑樹選手の爽やかな投球振りには酔いしれた。正に運は絶好調、一敗もしないというのは本当に珍しいことだ。3万6千人を越える大観衆、内外野を埋め尽くした早慶応援団、昭和30年前後の小生が学生であった頃を思い出させた。学生野球の爽やかさが、プロ野球と違った魅力を我々に与えてくれた。終わって渋谷の「うな鐵」での祝賀会、冷酒がこんなにも旨いのは、店の味自慢だけでなく、参加者の同窓意識に酔いしれたお陰であろう。特に、林田さんのます酒の飲みっぷりには、つい小生も釣られて3杯目に手をつけた。

一方において、目黒稲門会の各部会での活発な活動も特質すべきであろう。日本棋院での全早稲田戦でのA, B双方ともに目黒が優勝を勝ち取った。正に知力、精神力の充実で無ければ成しえない成果であったと思う。我が目黒稲門会会報は外岡先輩のご指導で、2年の間にしっかりした内容に充実した。10を越える各活動分野を全て紹介するわけには行かないが、各部会長のきめ細かいご配慮には頭が下がる。皆、よい歳をして、少年のような情熱で会員のサービスに当たっておられる。早稲田に学んだ幸せを、ひしひしと感じる。新会員の増加も戦略的とも言える、保井さんの手の打ち方など、正に知力というべきか？ 先日の、よん月会には、30名を越える参加者があり、満杯となった。今年は空梅雨、明日からは7月、暑い夏が続く、皆さん健康に気をつけて適当に暑氣払いをしながら、楽しく過ごしましょう。

39 梅雨の終わりに DATE: 07/29/2007 07:50:45 PM

この7月、日本各地で起きた大雨による災害に加え、新潟県中越沖地震、柏崎刈羽原発の事故などが発生した。災害の遭われた地域の方々の今後の復興が一日も早からんことをお祈りしたい。世界でも有数の地震国である我国のインフラの整備が、そして計画がこんなにも脆いものか？と腹立たしさを感じる。

さて、今日は7月29日、朝食を済ませて参議院選挙に出かけた。我が家から往復約2,000歩。汗びっしょりになってシャワーを浴び一休み。何時までたっても梅雨があけない。湿度の低いカラッとした夏はもう其処まで来ているのだろうが、今日の2,000歩は堪らなく暑かった。テレビでは東京も午前10時前に既に31度を越えたと伝えている。結局午前中は何もせず、朝から昼寝と決めこんだ。朝食を済ませ、夏の甲子園出場校を決める神奈川地区決勝戦、桐光学園対東海大相模をテレビで観戦。打撃戦の末10対8で桐光学園の勝利。まれに見る熱戦で必死の死闘が繰り返され、けが人も出たが、高校生の純粋な戦いぶりに感動した。

さて、この7月は我が目黒稲門会も第8回総会が開かれた。大学からは江夏副総長のご出席を頂き、総会から懇親会のお開きまで楽しんで頂いた。とにかく早稲田はいろんな困難を乗り越え大いに発展してきてはいるが、この125周年を乗り越えるための寄付が今や最大の問題となっているのではないかと思われる。

この7月、小生はゴルフは全くせずにプールに22回通った。これは来るべき8月以降の真夏のゴルフ、秋以降のゴルフに備えた積りであった。今やハンデキャップ33に落ちてしまったスキルでは、わが稲門会ゴルフコンペで、常に優勝者など上位を全て女性陣に占拠されると言う事態を少しでも回復するために、微力を尽くしたいと思っているからである。しかし結局は、多少飲みすぎても耐えられる体作りに水泳を活用したことになったようだ。

この8月は目黒稲門会の役員会は夏休みとなるが、小生が毎月参加している部会では3日には上野の西洋美術館のパルマ展、10日のカラオケ、27日のよん月会は実行される。みんなで暑気払い、健康な生活を楽しみましょう。



40 この8月の暑さに DATE: 08/30/2007 10:45:20 PM

先月の随筆に、プールでの健康確保について自慢話をした。そして7月29日の参院選挙の日、2,000歩を歩いて汗びっしょりなると弱音をはいた。実は原因があったのだ。どうも首の周りの痛さが尋常ではない。翌30日の朝、近くの皮膚科専門医に診断を仰いだら、ヘルペスだという。そして5日分の投薬と、塗り薬を貰った。実は8月1日は小生の末弟の三周忌で阿蘇まで出かけることにしていた。首の周りに薬を塗って、ガーゼで押さえ絆創膏姿で、一晩泊まりの帰郷で東京に帰ってきた。まるで、何処かの農林大臣みたいだと兄弟達から冷かされながらの三周忌だった。少しはセーブしたが、回復までの10日間、酒は一日も欠かさずに済んだ。酒は百薬の長と言うが小生は心からそう思って実行している。ヘルペスと言うヤツは、体が弱ってくるとウィルスが元気になって出てくると言う話だ。そういえば、先月のよん月会で少し度を過ごしたことを思い出した。やはり何事も度を過ぎさないようにしなければいけないと反省させられた。

それにしても、今年の8月の暑さはひどいものだ。お盆が過ぎれば東京も少しは涼しくなると思って先週2回のゴルフを計画していた。流石に暑すぎて、バンカーを脱出するのに14打と言う新記録を出し4組のコンペで勿論ブービーメーカーとなった。世界陸上の選手の活躍には、この暑いのにと同情せざるを得ない。甲子園の球児たちの活躍は今年も昨年と同じように、感動を与えてくれた。又、今年は水上にも17歳の王子が出てきたり、若いピチピチしたアスリートが各方面に現れてくるのは楽しい限りだ。そして9月からは東京六大学が始まる。春に続き早稲田の活躍に期待したい。

若さは素晴らしい。決してスポーツの世界だけでなく、政治の世界でも、実業の世界でも単に歳が若いと言うだけでなく、精神の若さを大切にしたいと思う。そして我々もまた、、、。

41 誕生日を迎えて DATE: 09/27/2007 05:25:25 PM

昨日、小生は76歳の誕生日を迎えた。喜寿とか米寿とかは、数え年で云う慣わしであるようなので、昨日は喜寿のお祝いの日だった。何人からかお祝いのお菓子や、酒が送られてきた。一方、インターネットのメールにも幾つかの祝メールが届いたが、バースデーケーキが写真添付されているものまであり、序に、いろんな商品のコマーシャルがついている。やはりお祝いのメッセージは、たとえ FAX であっても手書きの方が心が伝わって有難いと感じるのは歳の所為だろうか。

これは10年以上前の話だが、小生が富士通に勤務していたころ、情報化社会と言う言葉が流行し始めて通産省か郵政省の何かの委員会に出席していたときのことである。同席した某社の幹部が得意げに電子化の例を発表されたことがあった。小生は何と馬鹿げた話なんだろうと思った。それは、「社員の誕生日に、メールでお祝い言葉を送っていると言う話だった。社内のコンピュータによる情報化が進んだ結果、誕生祝も自動的に各社員の送られるようになって、手間が省けた。」と言うわけであった。貰った従業員はこんなことで喜ぶのだろうか？と独りよがりの幹部で、従業員がかわいそうだな！ と思ったことがあった。皆さんはどう感じますか？

小生は76年と言う歳を過ぎてきたが、途中3度の大病を経験した。特に社会人となって、結核、脳梗塞と本来ならば、とっくにクビになっている筈のところを、皆さんのお陰でこうやって76歳まで、毎日晚酌をやりながら、楽しく年金生活を送っている。しかも目黒稲門会の会長は既に3年を経過し、来年には新しい会長に交代することになるが、少なくとも健康を維持することは最大限の使命と思い、日々健康維持の為にプール通いは、続けていきたいと思っている。

この9月、東京六大学野球のリーグ戦も始まった。早法の2回戦に家内を連れて出かけ、ハンカチ王子の初敗戦を観戦してきた。翌々日の決勝には、彼も立派に立ち直り勝利を勝ち取ったようだ。今週は立教との戦い、土曜日から応援の出かける予定だ。



42 多忙な10月 DATE: 10/31/2007 08:10:46 PM

やっと今年の暑さから開放されてホッと息と言うところだが、10月と云う月は本当に色々な行事が殺到する重なる日々である。目黒稲門会関係だけでも、10月1日新そば会、5日役員会、14/15早明戦、20日稲門祭、21日125周年記念式典、22日よん月会、28/29/30早慶戦と、ひと月の1/3を占めた。

これに諸々の会合や、飲み会等の声がかかり、嬉しいことだが、聊か疲れてしまった。76歳を過ぎるとこうも疲れるものかと情けなくなってしまう。今夜31日も元の職場、富士通の稲門会(フトウカイと呼ぶ)の会合に招待されているが、流石に疲労が溜まり、先ほど欠席することに決めた。

この原稿も、もっと早く余裕を持って書きたかったが、早慶戦で雨のため土曜日が中止となり、更に初日に敗れたために3連戦となり遂に今日31日になってしまった。早慶戦の経過は斉藤投手の素晴らしいピッチングのことなど詳細が新聞各紙に記載されているので、ここに述べるまでも無いが、慶応の主戦投手の加藤選手の頑張りには敬意を表したい。早稲田の豊富な投手陣に対して、残りの力を振り絞り、9回まで完投した精神力を買いたい。往年の藤田投手(元巨人軍)がなかなか早慶戦で早稲田に勝てず悲劇の投手とも呼ばれていた時代を思い出した。

さて今年早稲田大学は創立125周年を迎え、華々しい式典が開かれた。世界中から68大学の学長やその代表者が参加され、福田総理のユーモアたっぷりの挨拶など楽しいひと時を過ごすことが出来た。早稲田は創立者大隈さんの信条に因み、125年を一世紀と考え、新しい次の世紀へと船出をした。伝統の早慶戦にも勝ち、六大学三連勝を達成し、125周年に華を添えることが出来た。願わくは、このような素晴らしい野球選手の活躍を稲門の出身者に、我が国の、そして世界のあらゆる分野での活躍に期待したい。

43 日本酒の話(その2) DATE: 11/29/2007 07:52:14 PM

11月になると、新年の欠礼のハガキが届き始める。あれ！あの人も亡くなったのか？と改めて亡くなる人が毎年増え、淋しさ一入である。

さて、今月は旅行部会の秋のイベントが25/26日にかけて尾崎士郎「人生劇場」の故郷・吉良を訪ねる旅を楽しんできた。この内容は旅行部会から、報告される筈なので、ここに詳細を述べることは差し控えるが、一泊2日の旅は、とても充実したものであった。改めて、井村部会長夫妻の御努力に感謝したい。

温泉での会食や、浜松でのうな重の昼食。一度に20人を越える客に出されたうな重は硬いといった評価もあったようだが、それは「蒲焼」の東西の手法の違いによるものようだ。小生は、これに日本酒の熱燗をたっぷりかけて食べた。全く舌鼓みを打つとはこのことだ。両隣の席の荒瀬先輩と星野先輩にもお勧めし、高評価を受けた。元来、日本酒は日本料理に合うし、いろんな食材に日本酒を使うと、味が豊になる。小生の場合、小学生の頃から、皿に盛られた焼いた塩じゃけには、日本酒をたっぷりかけて塩出しをしながら食べるのが、我が家の習慣だった。そして、残った酒を飲み干したりしていた。

と言うが、小生が脳梗塞になった後、若い医者から、酒は飲まないより飲んだ方が良いと云われた話は、2004年9月の本随筆欄で紹介している。以来小生は日本酒を絶やした事は殆ど無い。その飲み方も、熱燗、人肌燗、ヒヤなど臨機応変。食べ物、気候、体調に合わせて楽しんでいる。又アルコール度数も決して一定してはいない。電子レンジでチンしてお燗した後、氷をヒトカケラ入れて、アルコール度数を13度以下くらいに下げ、同時に、熱燗から人肌燗にするなど、いろいろ工夫しながら、そのときの環境に合わせて夕食を楽しんでいる。酒は、楽しむもので、決して暴飲してはいけない。まもなく、新酒が出来上がる季節になった。この時期の生酒はその出来立ての香りが何ともいえない。さあ日本酒の季節がきたぞ！そして明日は「老いらくの記念日」だ。



44 2007年の終わりに DATE: 12/27/2007 01:48:48 PM

2007年もあと数日となった。年の瀬になると何時も思うことは、「とき」の経つ速さだ。「光陰矢の如し」と中学時代に漢文の教科書に載っていたが、歳を重ねると、その想いは益々強くなる。小学校を卒業するまでは、そんなことを感じることは決して無かったと思う。

さて、昨年の年末のこの随筆を読み返して見たら、我が家の庭の辛夷の木には、葉っぱは全て落ち、春を待つ膨らんだ蕾の状況が載っている。今年は大分風情が違う。我が家の辛夷は、目黒区の保存樹に指定されているだけあって、結構早春に咲く白い花は見事なもので、道行く人々をも楽しませていた。しかし辛夷の小枝は風に弱い、強風に会うと折れて近隣の方々に御迷惑をかけてしまうので、この夏の末に庭師に手を入れてもらった。庭師が思い切って切りすぎたのか、12月末現在蕾は皆無の状態である。そして枝には未だ緑の葉が多く残っている。剪定した時期を間違えたのではないかと、今更悔やんでも後の祭りである。

それにしても、今年は嫌なことが相継いだ。そして2007年の漢字が「偽」に決まった。いやだなあ！と思ったが、調べてみると「偽」と言う漢字は、「ニンベンに、ツクリは為す」。即ち「人が為す」と言う意義から出来ていると言う。人間の為すことは、一步間違えると取換えしのつかないことになる。人間は知恵を持ったが為に、今や地球をも破壊しかねない愚かな行動をし合っている。ヒト以外の動物はこんな馬鹿な行動はしていないのではないだろうか？ 文明社会はヒトが造ったはずなのに、食品偽装の問題に始まった2007年の日本社会はこの「偽」に満ちていた。正しく現代の人間社会が騙し合い、利を貪り合いながら過ごしているようだ。

平成も、早や20年を迎える。心機一転、今上天皇、美智子皇后様に相応しい年となるよう、祈るのみである。

45 平成21年を迎えて DATE: 01/30/2008 05:29:40 PM

平成20年の1月が終わろうとしている。今日は久しぶりに東京も10度を越える日となったが、18日ぶりの暖かさだと今朝のテレビでは報じていた。連日我が家の池に氷が張り、やってくる雀も毛羽立てて丸くなって寒さを凌いでいた。何か今年は寒さが身に沁みてきて、本当に温暖化現象なのかと思ったりもしていた。この冬は家内ともども風邪も引かず元気に越冬できそうなどと話し合いながら居たが、考えてみればこれは当然の事である。今や現役を卒業して、毎日充分に朝寝を楽しみ、寒い時刻には外に出ないのだから、当然の結果である。現役の時代は、6時に起きて、薪ストーブの灰を庭先に出して新たな薪を詰めて火をつけ朝食を済ませ、朝8時の出勤時刻に遅れないように出かけていた。今も早朝、新聞を取りに玄関先にでると、現役の若人は白い息を吐きながら職場に出かける風景に出くわす。思わずご苦労さんと声を掛けたくなる。

さて、125周年を迎えた我が早稲田大学は益々隆盛を極めている。野球、ラグビー、サッカー、それに駅伝までもが好成績を挙げ、めでたいことだが、スポーツに限らず、総理大臣、宮崎県知事、昨日は大阪府知事までもが稲門出身となった。早稲田の世紀は125年を一期とするから、今年には新たな2世紀を迎えたことになる。益々の発展を期したい。我が目黒稲門会も新たな会員がこの新年会を期して3名増えた。もっと若い人が増えて貰いたいと言う声もあるが若い人は現役の職場での仕事で時間が無いとか、あるいは職場での職域稲門会で活躍されているだろうし、余り大きな期待は無理ではないかと思う。小生の場合で言えば、多くの校友が職場に増えていた時代だった。どうかすると、ちょっとした会議で担当者を集めると全員が稲門出身者であったことが結構多かった。むしろ、学閥を気にしなければならないような時代があった。個人での職場であれ、会社、団体の場合であれ、新しい分野への挑戦を恐れず、稲門出身者は進んで身を投じてもらいたいと思う。



46 寒い冬 DATE: 02/21/2008 11:45:06 PM

我が家の庭に梅の花が咲き始めた。フキノトウはずっと前から、地面に這いつくばってむしり取られるのを待っていて、春の香りがホンノリと美味しい。庭の小さな池には、メダカも太陽の光を浴びて水面に姿を現し始めた。今年の冬は何か格別の寒さだったが、日ごとに日没が遅くなり、春の訪れを感じさせられ、気分がウキウキしてくる。

1月の末、今年の冬は特に寒いと感じて、遂に近くのダイエーで、ダウンコートを買ってしまった。もう冬も終わりとあって正価の半額だった。小生にとっては生まれて初めて着るダウンコートだ。早速2月1日の目黒稲門会の役員会に着ていった。7年前に病をえて、全ての仕事(報酬を貰う)を止めて以来、葬式や結婚式など以外では背広とネクタイを着用することは殆ど無い。上着を着ずにセーターの上に直に着ても、全く寒さを感じない。こんなに便利なものがあつたのか?と今更感じ入っている。

ところで、中国からの輸入食品の問題やら、日航機のヒヤリとさせられる操縦者の勘違い、そしてイージス艦の漁船との衝突事故、コンピュータシステムの原因不明の障害など、あつてはならない現象が頻発している。全ての原因がハッキリするまでは、いたずらに論評は避けねばならないが、どうも日本人の心に緊張感が無くなっていることだけは確かな様だ。「怖れ怖れて事に当たる」と言うのがシステムに対処する時のチーム全員の合言葉だった。「驕りと慣れ」が一番怖い。

先日、みずほ銀行から、東京三菱UFJ銀行に取引の関係でATMを使って自動振込を試みた。そして直ぐに記帳の為に当該支店に行って自動記帳機に通帳を差し込んだら、確かにリアルタイムに記帳されていた。銀行業務のリアルタイム化、それも全ての金融機関をネットワーク化したのは日本が世界で初めてだった。昭和39年の東京オリンピックのあの女子バレーボールのソ連との決勝戦の実況も見ずに、システム開発に取り組んでいた自分を懐かしく思い出した。今となれば当然のことであるが、合併銀行が安全にシステム移行をするには大変な緊張がある筈、その任に当たっている方々のご苦勞を察している。

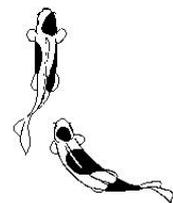
47 春は来たが、、、 DATE: 03/20/2008 10:23:19 PM

今日は彼岸の中日。朝から冷たい雨だった。一昨日、今年初めてのゴルフを元会社の10年後輩3人と楽しんだ。素晴らしい天候に恵まれ、奇しくも早慶2名ずつの早慶戦になった。結果は当然早稲田の勝利。終わって何時もの反省会を三次会まで楽しんだ。珍説が登場した。曰く「ゴルフの練習は、すればするほど下手になる」と言うのだ。不味いフォームが板についてしまうからだと言う。なるほど一理ある。小生のスコアは不問。まあ、3ヶ月ぶりにやったにしては、殆ど変わらない成績であった。

さて、3月に入り季節は足早に春へと近づいてきた。2月に姿を現してきた庭のメダカが春の陽射しに影法師を作り、池底に映った黒い影が恰も別の稚魚が泳いでいる様に見える。気が付くと、池には2匹の鯉の稚魚も姿を現してきた。孫が昨年夏釣ってきた2匹だ。冬の間、池の底の土管の中で耐えて来たらしい。そして、例年のことだが、ガマ蛙が池に現れてきて卵を産み始めた。今年はそれも7匹と例年の倍くらいだ。一方陸の上では庭に自然に生えてきた菜の花は一日毎に背を伸ばし黄色に咲き誇る。今年は我が家の青野菜はこの小松菜が殆ど毎日食を賑わせた。

明日は、リーガロイヤルホテルで校友会東京23区支部大会が開かれる。そして森元総理の講演を楽しみにしているが、政界の混乱は呆れるばかりだ。ネジレ国会の舵取りも大変だとは思うが、世界が大変な混乱状態にあるとき、我が日本国はどうなるのかと国民は心配している。地球温暖化問題、アメリカのサブプライム問題に端を発した世界同時株安問題、チベット問題を抱える中国、中近東の政治経済問題など、わが国が今こそリーダーシップを発揮しなければならない時に、福田現総理の奮起をお願いしたいと思うのは、我ら稲門全員の願いである。

春は中々やっては来ない、、、。



48 3月から4月にかけて DATE: 04/28/2008 04:28:57 PM

前回の随筆は3月20日だったので、早くも40日が経とうとしている。今年は一足早く桜が満開になった。3月27日に呑み川ほとり品川稲門会会長の桜井さんの御自宅にお邪魔して、花見をしながら、おでんを楽しんだ。桜井先輩は目黒稲門会の長老でもあるが、お元気で何よりである。

4月13日の日曜日、六大学野球が始まった。早東戦の二日目、家内と共に今期初めての神宮球場に出かけた。素晴らしい天候に恵まれ28対0の快勝を楽しんだ。もう一点獲れば昭和4年以来のタイ記録になったのに、、、。終わって、渋谷の「うな鉄」で祝賀の一杯。酒飲みは林田さんと小生だけなのに、外岡ご夫妻と八幡さんまでお付き合いを頂いた。

4月15日は大隈会館で東京都23区の支部総会に出席した。支部長の任期を複数年にしようとの動きもあるが、そのような議論は総会では一切出ないので気楽なものだ。因みに小生の意見では1年で充分だと思う。

4月22日は目黒稲門会のゴルフ大会、絶好の天候に恵まれ、千葉県の難コースであるオークビレッジを6組で楽しんだ。素晴らしいコースにみんな満足。それにしても外岡さんの2位入賞には正直全員ビックリ。とても80歳の「何とか高齢者」とは信じられない力である。小生は1月、2月の寒気にはゴルフは避けていたが、4月に入り、3回のゴルフを楽しんだ。先日、富士通時代の同輩の「1,900回のゴルフを祝う集い」に出席してきたが、小生の消極的なゴルフに対する姿勢に軽蔑の眼を向けられてしまった。そろそろ週2回位のゴルフに挑戦しようかと思っているが、それにしても直ぐに腰が痛くなってきたり、翌々日まで残る疲労感からどう脱出するのか？ 何方かに御忠言を頂けないものかと思案している。

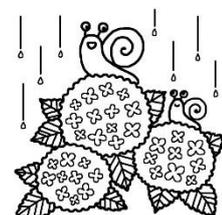
昨日、神宮球場に出かけ、早法二回戦を観戦してきた。小学校6年生の孫を連れての観戦だったが、1対0勝利。今期2勝目となった。孫は、ネット裏での観戦は初めてだったらしく、これなら双眼鏡は要らないなあ！と悦に入っていた。

49 2008年5月の終わりに DATE: 05/31/2008 12:26:26 PM

今日で5月も終わり、29日から降り出した雨はまるで梅雨の様だ。鹿児島や四国は既に入梅とテレビは告げているが、東京も梅雨と変わらないようだ。予定されていた早慶戦は9時30分現在1時間開始を遅らせるとテレホンサービスは告げているがこの雨では中止の可能性が強い。

多分この原稿を書き終わるころには、中止となるに違いない。もっとも今期は明治の優勝が既に決定しており、早慶戦も人気今ひとつと言ったところだろう。なかなか連覇を続けるのは難しいようだ。それにしても、2週間前の早明戦での早稲田の貧打ぶりは一体何だったのか！ 反省会をやる気にもならなかった。

さて、小生も今年で会長の任期を終える。至らない会長であったが、皆さんのご協力でどうやら責務を果たすことが出来そうであるが、任期満了の次期総会まで恙無くすごしたい。目黒稲門会は設立時から、会長の任期を1期2年、2期迄と決められている。これは目黒稲門会を会の性格から、「出来るだけ多くの方が会に関わりを持ち、皆の懇親の実を深めるべし」との真仁田前会長の考え方を基本に運営されているからである。早稲田大学校友会でも、8年以上会長をした人を表彰したりした事もあったようだが、このような会の会長は独り占めすべきモノではない。小生は2期4年を勤めさせて頂いたが、「集まり散じて人は代われど、、、」皆さんの多くが、多くの部会の役員や雑用を引き受けられ、特に現役を引退後も目黒稲門会を交流の場として和気藹々の雰囲気を楽しんで来られてきた事を会員一同が誇りに感じて良いのではと思う。



50 2008年6月の終わりに(最終号) DATE: 06/28/2008 06:07:57 PM

今日も梅雨らしい天気だ。今年の気候は全く異常だ。もっとも毎年そんな事を言いながら一年がおわる。世界の気象異変は各地に災害をもたらし、貧困に拍車をかけている。昨年末、平成19年を象徴した「偽」が話題になったが、半年経った今も拍車をかける様な状態であることは真に残念なことだ。牛肉の偽装、中国産うなぎの偽物は未だに続き、官僚のタクシー券問題、社保庁のデータベースの混乱等、数え上げればキリが無いほどのだらしなさに啞然とするばかりだ。緊張を無くした国はこうも駄目になってしまうものなのか？ 公務員法の改正案が可決された様だが、願わくは根性を持った公務員を育てて貰いたいものだ。

さて、小生はこの7月6日の総会で2期4年に及ぶ会長職を辞任することとなった。あっという間の4年だった。幸いにも目黒稲門会の良きメンバーに支えられ、楽しい時を過ごさせて頂いた事に何よりも感謝申し上げたい。ほとんどのメンバーとは目黒稲門会に入会した後にお付き合いが始まったものだが、校歌にあるように、「集まり散じて人は代われど、仰ぐは同じき理想の光」である。考えて見れば小生も早稲田を卒業して50年以上が経っているが、目黒稲門会のメンバーとは会った途端に旧友に会った気になるのが不思議な感じだったのを思い出す。昨年は早稲田大学創立125周年を迎え、募金活動にも全員が協力し、目標を達成できたことも意義あることであったと思う。6日の目黒稲門会総会で次期会長選出の舞台裏などは報告するが、会長推挙委員会で満場一致、役員会でも満場一致で新会長を迎えることが出来たことは、小生の芯からの喜びであった。ここに4年間に渡り毎月駄文を掲載させていただいたが、これをもって打ち止めとさせて頂く。皆さんありがとうございました。

付録 それはマッカーサーが作った法律か？ DATE: 04/24/2005

昭和39年、1964年は小生にとっても記念すべき年である。その年の10月には東洋で初めての東京オリンピックが開かれた。東京の街には高速道路が出来、新幹線が開通と正しく日本が戦後の貧困から脱却し始めた年であった。

小生はその年の5月13日に羽田からニューヨークに出発した。当時、日本航空はアメリカの東海岸までしか乗り入れが出来なかった。アメリカ国内には日本の航空会社の乗り入れは許されて居なかったのだ。小生はサンフランシスコからニューヨークまではAAアメリカンエアラインで飛んだ。初めてのアメリカの stewardess のサービスを受けて、意外と年とった女性達であるのにそんなものかとちょっとがっかりした。出張の目的はオンラインバンキングシステムの調査研究であった。当時富士通ではデータ通信システムの開発に懸命になっていたが、小生もそのメンバーの一員だった。正直言って富士通は日本においてもまだ、マイナーな存在であった。当時、日本の銀行で国産のコンピューターを使っている例は無かった。そういう中で、本格的なオンラインシステムに挑戦しようとしたのである。銀行の勘定系と呼ばれる預金、為替、貸付の三大業務にコンピューターを使ってオンラインリアルタイムに処理しようというわけである。いくつかの銀行の実態を見学させてもらった。驚いたのは、小生が考えていたシステムはひとつも無く、殆どが小切手処理の現場であった。MICR (Magnetic Ink Character Recognition) と呼ばれる技術を使った小切手現物の分類集計機(リーダーソーター)があたかも工場の設備にも似て、ずらりと並んでいて動作しているところを夜中に見せられた。

「お金は本質的には、経済的価値を担った情報であり、電子的な情報が紙幣や小切手に変わる筈だ」というのが、アメリカのバンキングオートメーションの狙いであった。ところが、アメリカ人は、経済的価値を担った情報にも確固とした証拠物件(モノ)が無いと信用しない。その唯一のものが小切手なのだ。膨大な量の小切手を交換所に出し、この現物を取り扱い銀行を経由して最終的には、振り出した個人に返却し、個人はそれを受け取り一枚一枚確認して一連の取引完了となる。給料の銀行への自動振込とか、電気、ガス、電話等々の自動振込も普及できない。これは、アメリカの真似をしても日本では銀行のためにならないし、逆に、これから開発しても勝てると思開発に拍車をかけた。昭和43年には、我々の最初のプロジェクトは成功裏に終わった。

さて、銀行のコンピューターセンターで働いている人たちの中には、女性が多い。「女性が夜中に働いているけど、この国では女性が夜中に働いても良いのか？」と小生が尋ねた。銀行の担当者から、怪訝な顔をして「何故女性は夜働いてはいけないのか？」と逆に質問された。日本には、「労働基準法という法律があって女性は夜の労働を禁じられている実態」を説明した。すると相手はびっくりした顔で、「その法律はマッカーサーが作った法律か？」と質問。苦笑した。

今や、我が国では女性が強くなった。すべての面で男女同権、女性の本質的な存在価値は男と同じ仕事をする事なのか？ 今、小子化の進行が進行している。子供を産めるのは、女性しかいない。女性は何故子供を作りたがらないのか？ 男女平等に育児をという話も盛んであるが、これにしても人によって特徴を生かせば良いのではないのか？ 人間の価値というものを、じっくり考え直すときではなかろうか。

付録 手帳一冊、酒一升 DATE: 12/10/2009 （目黒稲門会会報第46号掲載）

大事件が発生した。大事な手帳を紛失してしまった。

現役を退いてほぼ10年が経つ。長年のスーツ着用の習慣を捨て、ネクタイ無しの気軽さの代償に何処に出かけるにも小さなショルダーバッグを持ち歩くようになった。小生、近頃めっぽう忘れ物が多くなってきた為でもある。

このバッグには、嘗て背広のポケットに入れていた小生の全情報が入っている。その中に在るべき手帳が無くなったのだ。

去る11月の中旬、以前勤めていた富士通の後輩連中との会合に出席し、少し飲み過ぎて車で帰宅した。翌朝、予定の確認をしようとバッグを開いたら手帳が見つからない。

この手帳には、予定表や友人知人の電話番号等のほかに、小生の大事な情報がすべて書き込まれている。

昨夜の車の中に忘れたに違いない！ そういえば車の中で手帳を見て、会合に出席しなかった後輩に電話したことを覚えている。早速、関係者や運転手に調べてもらったが、何処にも見当たらないと言う。

何れにしても手帳の情報を復元しなければ、今夜からの活動に差し障りがあると思い午前中いっぱいをかけて、パソコンに残っている情報をプリントして、ニワカ作りの手帳を仕上げた。

この夜は、熊本県人会の総会で500人以上の参加者があり、会が盛り上がっている最中に家内から携帯電話のベル、手帳発見の通報であった。

手帳の発見者は隣家の市瀬さんと言う。手帳は雨の中、一晩を過ごしたらしい。市瀬さんが夕刻、はがきをポストに入れに出かけたときに、隣の「駐車場の前の路上に落ちていました」と言うメモ付きで、家内に届けてくださったものだった。

小生は天にも昇る気持で、トッテオキの「霊山」を一本持ってその夜市瀬さんに届けた。市瀬夫人から、うちの旦那様が突然隣から大好きなお酒が届き、一升瓶を抱きかかえて喜んでいと伺った。

小生としては真からの感謝の印であったが、これも稲門会の仲間がなせる業か、それにしても良き隣人との付き合いは益々深くなっていく！

後日談・・・

某氏曰く・・・加藤さんの後からついて行くと、忘れ物や拾いものがあり、一升瓶にありつけるのではないか・・・！

目黒稲門会設立15周年記念
加藤榮護 随筆集

発行日 2014年6月吉日

著者 加藤 榮護

発行所 早稲田大学校友会
目黒稲門会事務局

本書は、加藤榮護氏が目黒稲門会会長であられた2004年6月から2008年6月にわたり毎月同稲門会のホームページに投稿されたエッセイを編集したものである。
巻頭のイラストは、㈱PFU 社員の小村真由美氏によるものである。

